

第59回東京都公民館研究大会記録

主催 東京都公民館連絡協議会

大会事務局 小平市公民館

目 次

1	第59回東京都公民館研究大会開催要項	1
2	東京都公民館連絡協議会会長挨拶	5
3	東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課長祝辞	6
4	小平市長祝辞	7
5	基調講演（講師：池谷 美衣子氏）	8
6	課題別集会	
	第一課題別集会（日野市）	14
	第二課題別集会（国分寺市）	27
	第三課題別集会（職員部会）	37
	第四課題別集会（委員部会）	48
7	アンケート結果	65

第 59 回東京都公民館研究大会開催要項

コロナ禍を乗り越え進化する公民館

1 開催趣旨

地域コミュニティの中核施設である公民館は、地域住民にとっての身近な社会教育施設として、また、「つどう」「まなぶ」「むすぶ」ことを促進する「人づくり」「つながりづくり」「地域づくり」の拠点としてその役割を担ってきました。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症による大きな日常の変化が、公民館にも大きな影響を与えました。多摩地域でも大半の公民館が臨時休館を余儀なくされ、その後もさまざまな利用の制限を設けることとなり、以前と同様の活動はままならない状況です。活動の休止や解散を強いられたサークルも多く、公民館利用者の多くは社会参加の機会を失い、孤立を生み、心身の健康や心理的安定の悪化などが懸念されます。

また、社会においては、オンライン会議システムの活用などのICT化が急速に進みました。その中で公民館は、対面で活動ができない状況を克服すべく、講演会や主催講座のオンライン化にも積極的に挑戦し、東京都公民館研究大会でも、この2年間はオンラインでの開催に取り組みました。これまで対面での活動が中心であった公民館にとって大きな転換点となりましたが、Wi-Fi環境を始めとしたハード面の整備など、潜在的な課題とは別に新たな課題も浮かび上がってきました。

公民館がこれまで取り組んできた地域の問題解決や、公民館自体を取り巻く環境の変化への対応に加え、ウィズコロナ、ICTやSNSなどの活用や環境整備といった新しいテーマを踏まえて、今後の公民館のあり方を考える必要があります。今大会は、公民館が描く未来像を再確認し、今後のあり方を見出す機会として開催します。

- | | |
|-----------|--|
| 2 主 催 | 東京都公民館連絡協議会（以下「都公連」という） |
| 3 後 援 | 東京都教育委員会、東京都市長会、東京都町村会、東京都市教育長会、東京都町村教育長会、東京都市町村教育委員会連合会、小平市教育委員会 |
| 4 日 時 | 2023 年（令和 5 年）2 月 4 日（土）
午後 1 時 ～ 午後 4 時 30 分 |
| 5 開 催 方 法 | 課題別集会ごとに参集する対面による集合形式（第一課題別集会のみ、原則オンライン参加、対面も可）（コロナの状況により、開催方法を変更することがあります。） |
| 6 会 場 | 小平市中央公民館（第一課題別集会）、小平市福祉会館（第二課題別集会）
西東京市柳沢公民館（第三課題別集会）、国分寺市本多公民館（第四課題別集会） |
| 7 プログラム | 午後 0 時 30 分 ～ 開場・受付（各会場にて）
午後 1 時 ～ 4 時 30 分 基調講演（録画）、課題別集会（各会場にて） |
| 8 基 調 講 演 | 講師：池谷美衣子さん（東海大学ステューデントアチーブメントセンター准教授）
テーマ：コロナ禍を乗り越え進化する公民館 |

9 課題別集会

<課題別集会 概要>

会場・想定人数	テーマ・報告事例概要	企画運営
第一課題別集会 会場：小平市 中央公民館 (原則、オンライン 受講型で開催しま す。対面は20人程 度)	テーマ：明るい兆しの中で～コロナ禍の公民館を振り返る～ 新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けた公民館では何があったのか？ 今まで長い歴史を携え、市民と共に駆けてきた公民館ではありますが、学びがストップした事により、利用者、職員がそれぞれの立場で「公民館の学びとは何だったのか？」と考えさせられたと思われます。 日野市では、臨時休館を失われた時間と捉えず、新たな「気付き」や「学び」の機会として、試行錯誤して来ました。 公運審と職員とが連携して実施した公民館利用者へのアンケート調査や聞き取りをとおして得た一つの回答は、「失敗を恐れずチャレンジを続けよう」でした。そこで、利用者の思いと公民館の思いを融合させた新しい試みを紹介したいと思います。 助言者：佐藤智子さん(東北大学准教授) 事例報告者：①諸星智子さん(日野市公民館登録サークル NP) ②大村国博さん(日野市中央公民館 係長) ③丹間康仁さん(千葉大学教育学部准教授)	日野市
第二課題別集会 会場：小平市 福祉会館 (80人程度)	テーマ：地域に広がる・つながる公民館になるためにどうしたらよいのか 地域の繋がりが希薄になりつつある社会において、公民館が学校や地域から求められているもの、学校や地域と共にできること、市民や地域が主体的に公民館事業に関わるためにどうすればよいかなどについて事例をもとに考えませんか。またコロナ禍で活用が広がったオンラインについて、先進事例を聞くことで今後のオンラインの活用についても考えます。 助言者：倉持伸江さん(東京学芸大学教育学部准教授) 事例報告者：①学校との連携から広がる公民館 矢島英明さん(国分寺市立第九小学校長) ②オンラインを活用した新たなつながり 出口亮太さん(長崎県長崎市北公民館長) ③公民館事業への市民参画から地域づくりへ 中村和幸さん(なかまちテラス仲町公民館長)	国分寺市
第三課題別集会 会場：西東京市 柳沢公民館 (40人程度)	テーマ：地域課題をどうやって捉えるのか 公民館では年間を通して多くの講座が実施されています。公民館職員は地域住民が抱える様々な課題(地域課題や生活課題等)を把握し、課題解消に向けた講座を企画・実施しています。 本課題別集会では、公民館職員の悩みどころである『地域課題をどうやって汲み取るのか、捉えるのか』ということに焦点を当て、今後の講座企画の一助となる内容で実施します。 また今回の研究大会のテーマ「コロナ禍を乗り越え進化する公民館」を受け、全国でも先進的な事業を数多く展開している、静岡県浜松市職員の野嶋京登氏を迎え、『みんな笑顔のまちづくり～実現への秘策～』と題して、事例報告を行っていただきます。グループワーク後には、日本女子大学田中雅文教授よりご助言をいただき、また野嶋氏からも助言いただきます。 助言者：田中雅文さん(日本女子大学人間社会学部教育学科教授) 事例報告者・助言者：野嶋京登さん(浜松市職員、富塚協働センター主任、コミュニティ担当)	職員部会 (部会長市西東京市)
第四課題別集会 会場：国分寺市 本多公民館 (80人程度)	テーマ：次世代に公民館をつなぐ ～学生・子育て世代が考えるこれからの公民館～ コロナ禍で「対面」の重要性が再確認されたとともに、リモートなど新しい情報技術の導入も課題となって浮かび上がってきた。そこで、社会教育実習を経験した学生と子育て世代の事例発表を通し、公民館を次世代にどうつなげていくかを話し合います。 助言者：柴田彩千子さん(東京学芸大学教育学部准教授) 事例報告者：①東京学芸大学学生 ②諏訪玲子さん(国分寺市PTA連合会、国分寺市立公民館運営審議会委員、雑誌「社会教育」に連載中)	委員部会 (部会長市国分寺市)

10 参加申込

参加対象	公民館運営審議会委員、公民館職員、社会教育関係者、生涯学習関係者、その他本研究大会に関心のある方、どなたでも参加できます。
参加費	1,000 円
申込方法	都公連加盟市（昭島、町田、小金井、小平、日野、国分寺、国立、西東京、福生、狛江、東大和市）の方は、お住いの公民館及び生涯学習センターの窓口でもお申し込みできます。その場合、現金での支払いも可能です。
	都公連加盟市以外の参加希望者は、別添の申込書により、大会事務局までお申し込みください。（持参、郵送、メール、FAX 可）
	都公連加盟市の職員や審議会委員などの参加者は、各市で取りまとめのうえ、別様式で大会事務局まで。後日、請求書を送付いたしますので、振込先へご入金ください。
	共通 ※会場の収容人員等の都合により、ご希望の課題別集会に参加できない場合もあります。申込書には必ず第3希望の集会名までご記入ください。（第一課題別集会のみ、対面かオンラインかご記入ください。） ※手話通訳をご希望の方は、申込書にその旨ご記入ください。
申込期限	12月23日（金）まで
支払期限	1月20日（金）まで 受付確認の連絡後、振り込み先へご入金ください。（期限までにご入金がない場合は、申込をキャンセルさせていただきます。）
振込先	多摩信用金庫 一橋学園支店 普通預金（口座番号）0334280 とうきょうとこうみんかんれんちくきょうぎかい （口座名義）東京都公民館連絡協議会 とうきょうとこうみんかんけんきゅうたいかいじむきょくちょうすえたかかずなり 東京都公民館研究大会事務局長 季高 一成
参加までの流れ	①「参加申込」を大会事務局へ提出する。 ②「受付確認」の連絡を大会事務局より受ける。 ③「参加費」を振り込む（銀行振込、手数料はご自身の負担となります。）。 ④第一課題別集会のオンライン参加者に必要な情報はメールにて送付します。

開催要項は、都公連ホームページでご覧になれます。

また、研究大会の報告は、後日、都公連ホームページに掲載します。



都公連ホームページ
QRコード

- 11 <会場案内図>①小平市 中央公民館（小平市小川町2-1325）
 ②小平市 福祉会館（小平市学園東町1-19-13）
 ③西東京市 柳沢公民館（西東京市柳沢1-15-1）
 ④国分寺市 本多公民館（国分寺市本多1-7-1）

※各会場とも駐車台数に限りがありますので、できるだけ公共交通機関をご利用ください。

第一・二課題別集会会場



第三課題別集会会場



第四課題別集会会場



- 12 問い合わせ 第59回東京都公民館研究大会事務局
 小平市教育委員会 教育部中央公民館管理担当
 〒187-0032 小平市小川町2-1325 小平市中央公民館
 電話 042-341-0861 F A X 042-341-0883
 E メール kominkan@city.kodaira.lg.jp

第59回東京都公民館研究大会の開催にあたって

第59回東京都公民館研究大会に多数の方のご参加を賜りましたことを心より御礼申し上げます。

今年度の研究大会は、約3年ぶりとなる集合形式での開催となりました。

開催趣旨にもあるように、公民館は、地域住民にとっての身近な社会教育施設として、また、「つどう」「まなぶ」「むすぶ」ことを促進する「人づくり」「つながりづくり」「地域づくり」の拠点として、その役割を担ってきました。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響により、新しい生活様式が広がるとともに、公民館においても、ICTの活用が急速に進み、研究大会においても、この2年間はオンラインでの開催に取り組みました。

その後、感染拡大防止と社会経済活動の回復との両立を進めるという政府の方針が示され、各公民館において、コロナに負けない公民館活動の活性化に向けた様々な取組が行われています。

そこで、本大会では、全体テーマを「コロナ禍を乗り越え進化する公民館」と掲げ、4つの課題別集会ごとに参集し、基調講演の録画視聴、対面による課題別集会を実施いたします。また、一部の課題別集会では、オンラインでの参加も取り入れたハイブリッド開催に取り組みます。

本大会が、皆さまにとって有意義で実りのある大会となることを期待しております。

結びに、本大会で事務局をお引き受けいただきました小平市公民館の皆様、基調講演の講師、課題別集会の助言者及び事例報告者をお引き受けいただいた皆様、また、本大会開催にあたりご支援、ご協力いただきました関係機関、関係者の皆様に、東京都公民館連絡協議会を代表いたしまして、心より感謝を申し上げ、私のご挨拶とさせていただきます。

令和5年2月4日

東京都公民館連絡協議会
会長 西久保 陽子

祝 辞

第59回東京都公民館研究大会が、小平市をはじめ関係者の皆様方の御尽力により開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

公民館は各地域の実情や特性を踏まえながら、地域住民同士が共に学び、活動する社会教育の拠点として、人づくり、地域づくりに貢献してきています。

しかしながら、この3年間、新型コロナウイルス感染症の拡大が、各公民館がこれまで築いてきました諸活動に大きな影響を及ぼすとともに、その影響を受けて、本研究大会も過去2年連続でオンライン開催を余儀なくされました。

このような制約や困難がある状況の中にあっても、公民館がこれまで培ってきた意義や役割を継続するため、皆様方はオンラインでの講座の実施をはじめとして、地域住民の「学びを止めない」取組に尽力してきました。

今回の研究大会では、「コロナ禍を乗り越え進化する公民館」をテーマに開催されますことは誠に時宜を得たものであると思います。

これまでの研究大会は担当する自治体で基調講演、課題別集会を実施する方式がとられていましたが、今回の研究大会では複数の自治体と連携して課題別集会が行われるとともに、対面とオンラインの両方を用いたハイブリットで開催されると伺っております。

まさに、公民館が社会状況を踏まえながら、地域課題等の解決に向けて、新たな展開を進めて行こうという、公民館関係者の皆様の強い意志が伺える大会であると思います。

基調講演や課題別集会での協議等の成果を生かしまして、各公民館での実践活動につながっていくことを大いに期待しております。

最後に、本研究大会が実り多いものになるとともに、皆様方の御健勝と御活躍を祈念申し上げます、私の挨拶とさせていただきます。

令和5年2月4日

東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課長

荒木 進太郎

祝 辞

第59回東京都公民館研究大会がここに開催されますことを、心よりお慶び申し上げます。

また、平素より公民館活動を通じて地域活動に取り組まれていることに対し、改めて感謝を申し上げます。

これまで各自治体の公民館は、地域住民にとっての身近な社会教育施設として、多くの方々の「であい・ふれあい・学びあいの場」として、また、「人づくり」「つながりづくり」「地域づくり」の拠点として、活力とうるおいのある地域社会の実現に大きく貢献してきました。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症により、社会生活は大きく制限されることになり、公民館における活動も大きな影響を受けました。また、ICTの急速な発展により、これまでの活動とは違った活動の形態も進められてきていると感じられます。

そうした中で、開催される今回の研究大会のテーマは「コロナ禍を乗り越え進化する公民館」とあり、公民館がその役割を担ってきた「人づくり」「つながりづくり」「地域づくり」もこのコロナ禍をきっかけに進化していくのではないのでしょうか。

これからも公民館を活用し、共に学び合う社会教育を通じて、人と人とのつながり、絆を深めることで、地域コミュニティの醸成が図られることを願っております。

本大会での研究が、公民館に関わる皆様にとって、今後の公民館のあり方を見出すきっかけとなれば幸いです。

最後に、基調講演をお引き受けいただきました池谷美衣子先生をはじめ、課題別集会助言者並びに事例報告者の皆様、そして、大会開催にご支援をいただきました関係者の皆様に、心より感謝を申し上げます。

令和5年2月4日

小平市長 小林 洋子

第59回東京都公民館研究大会 基調講演

コロナ禍を乗り越え進化する公民館

東海大学スチューデントアチーブメントセンター准教授 池谷美衣子 氏

企画運営:小平市

コロナ禍を乗り越え進化する公民館

東海大学スチューデントアチーブメントセンター准教授 池谷美衣子 氏

はじめに

東海大学の池谷と申します。普段はキャンパスのある平塚市など神奈川をメインに活動しており、東京のことはよくわかっておりませんので、全体に関わるテーマでお話しをさせていただきます。

この研究大会や基調講演のテーマとして、「コロナ禍を乗り越え進化する公民館」というお題をいただきました。このテーマを理解する上でこの「進化」という言葉ですが、色々な意味があるようです。成長や改善という意味では使われず、また単純に進歩していくという意味でもなさそうです。使わない機能は退化していくということも含めて、進化とは必ずしも前進していくものとは限らない。つまりコロナ禍を乗り越えて「公民館ではない新種のものが登場する」というのも、もしかしたら進化として受け止めなければならないのかもしれない。そうすると、「コロナ禍を乗り越えたあとに、公民館が果たしてどんな形で生き残っているのか」ということを本気で考える、そういった趣旨かなというように考えました。

今日は前提として、このテーマに込められた思い「コロナを無かったことにはしない」「コロナ前に戻ることを目指すわけではない」というところを共有しつつ、コロナ禍での様々な気付きを活かして、次の公民館を目指していかなければならない、という非常に強い危機感や不安を基に今回の企画が立てられてきたのだと受け止めています。

そのためにどんなことができるか、また、コロナ禍の経験から私たちが何に気付いたのかというところを考えたいと思います。

コロナ禍の影響は生活の至る所にあるため、視点①「事業と対象」、視点②「施設職員と職員」、そして地域課題や生活課題という言葉では収まらない視点③「世界共通課題」とこの三つの観点から考えていきます。

手がかりとして2つ、私も関わってきました日本公民館学会「コロナ特別プロジェクト」で、2021年に全国10市へ実施した公民館アンケートと、私の関わっていた平塚市での活動を参考にしていきます。

アンケートは、地区公民館やそれに類する施設が設置されている比較的人口の多い10市での調査です。この中で、「コロナ禍における公民館の職務を通して、何か新たな発見や気付きはありましたか」という問いに対して、7割の職員が「あった」と回答しており、これ自体がコロナインパクトだろうと思います。全国の様々な自治体の公民館職員の方が何かしらの気付きを得ているというのは、とても大きな出来事です。どのような気付きだったかはまだ整理ができていない部分もあるのですが、この中から視点①～③について考えていきます。

視点①：事業と対象

視点①は「事業と対象」ということで、コロナ禍での取組についてふれていきます。

コロナ禍で、オンラインの事業が公民館の新たな事業形態として生まれ、あるいは普及しています。コロナ禍以降でも、社会のインフラとしてのオンラインに、どこの公民館でも取り組むことになっていくと思います。ただ、オンラインの事業の話はもう既に色々なところで報告されていますし、取り組みとしてもかなり情報が出てきていると思います。私が注目したいのは、コロナ禍で生み出された「集まらない事業」という発想や実践です。

皆さんの公民館でも、事業として人を集めることができないとき「何もやらない」でなく「何かやろう」としたところが多かったのではと思います。平塚市の事例で、自宅でやってきてもらったものを成果物として報告してもらったり、公民館のフェンスや外壁を使って展示したりといった取り組みがありました。2020年度で40事業が「集まらない事業」として実施され、対面で集まる事業が再開してからも続いています。こういう変化を考えると、コロナが無かったことにはならないのだろうなと思います。アンケートの中で印象的だった記述で、「来館者ありきに依存した運営のリスクへの気付き」というものがありました。公民館は来館者に依存してきたのではないかと、それは公民館の運営としてはリスクだったのではないかとということに、現場の人たちが気付いてきている、ということです。

視点①から、これまでの公民館が来館者中心の発想で色々な取り組みが蓄積されてきたということを、もう一度考え直したいと思います。「公民館は誰を対象にしてきたのか」を考えると、公民館に来ることができる人たち、あるいは、社会教育や地域活動に関わることができる人たちだったのではないかと。確かに公民館に来れなくなるとそこ

で縁が切れてしまうことはあり、公民館に来ることができる人たちの役には立つかもしれないけれど、公民館に来ることができない人たちについては、私たちは力を発揮できていなかったんじゃないか、とコロナ禍で誰も来ることができなくなったときに改めて思いました。

また、地域活動に関わることができる人たちに関わって、たとえば仕事が忙しくなると「しょうがないね」という風に終わってしまう。内閣府の調査などでも、生涯学習をしない理由として「時間がない」というのが常に上がるのですが、そのような問題も公民館や社会教育に関わる者として認識していく必要があるのではないかと思います。「学習のために必要な環境整備」というのは、オンラインの導入だけではなく、人々が地域活動や公民館活動に関わるために何が必要なのかということを総点検し、公民館がすべての人の生活や人生をより良くする基盤となるために、もう一度私たちの役割を見直していく必要がある。これが、視点①からの気付きです。

視点②：施設運営と職員

視点②「施設運営と職員」という点では、アンケートでも職員さんの様々な葛藤が出ていました。大きく3つ紹介しますと、一つは厳しい感染症対策の中で、公民館は無力だったというもの。やりたいこととできることのギャップが大きかったのかなと思います。二つ目には、行政との関係の中で非常に悩んだというもの。現場としてやりたいことと行政から言われる指示との違い、これは感染症の流行状況に応じて変わっていったのですが、少なくとも公民館が思うように判断したり決定したりすることができ

なかったというのは、次への課題になってくるかと思います。三つ目には、住民のため・利用者のためといっても、実は住民の考え方が実に多様であったというもの。コロナに対する感覚の違いや、行事開催の是非についても葛藤されたようです。会議や行事が減少したことへの不満と同じぐらい、その現状に満足する声があったというのは、とても大きな宿題だなと思います。今まで嫌々やっていた、あるいは、やらなきゃいけないと思ってやっていたけど実は負担だったという感覚もあったということです。このことを知った以上、なかったことにはできないだろうと思います。

それぞれの葛藤や対応について評価を下すのはまだ難しいと思いますので、現状を記録していくことが今は重要ですが、今後は、それらの記録を研究・検証することが、次のパンデミックに備えるということにつながっていくのではと思います。また、オンラインツールの使い方や感染症の正しい知識、感染者や医療従事者への差別問題など、職員さん自身に求められたことも多様でした。アンケートの中でも価値観や仕事に向き合う姿勢など、いわゆるマインドセットの話がたくさん出てきました。

その中で共通して、「できないからやらない」でなく「どうやったらできるか」「できることを考える」といった姿勢こそが必要だったという意見がたくさんありました。こういった姿勢がコロナ禍でとても大きく問われたのではないかと思います、一つの気付きです。

しかし、このような気づきを職員の課題とするのに有効な組織的・計画的な研修が困難になることも、コロナ禍では多かったはず。その一方で、危機感から情報を探し、オンラインを使って違う自治体から知

恵と工夫を集める職員さんもいました。たとえば、宮城県名取市と島根県松江市がオンラインで合同研修をやるというのは、コロナ前であれば考えられなかったし、Zoomで全国の職員が定期的に集まるなど、色々な形で情報を得て学ぼうと積極的に動いた職員さんが、コロナ禍にはいたことも確認できます。

ここから、公民館や職員の「自律的判断」をどう育むかが、大きな課題となりそうです。自治体による取り組みの違いを記録化し、比較や検証をすることが、色々な人が困った状態に陥った際に、学び続けるために一体どうすればいいのかということを考えていくことにつながるかなと思います。視点②の気付きは、この「自律的判断」を育んでいくために、私たちは何を変えていかなければならないか、ということでした。

視点③：世界共通課題

視点③で「世界共通課題」を挙げました。このコロナの危機は、この時代を生きる世界中の人たちが共通して経験した出来事でした。この世界共通課題に対して公民館がどう関わるのかということを考えてみたいと思います。コロナ以前から、ESDやSDGsなど持続可能な社会を作っていくための世界的な取り組みが、公民館の現場などでも聞かれるようになってきました。これら世界共通の課題は、まだどこにも正解がなく、この「正解のなさ」が世界共通課題のポイントとなるかと思います。これに向かい合って考え続けたり挑戦したりというのは、実は教育や学習の原風景ではないかと感じました。「コロナだからしょうがない」と言ってしまうのか、けれども何かをしていかなきゃいけないという主体性を手放さ

ずにいるのか、このあたりが問われたと思いますし、公民館や職員だけでなく地域の方々も直面したことだと思います。コロナが終わっても、これまでと同じように地域の課題や生活の中の課題と向き合いながら、そのことと世界との関係を意識していくことが、この先の公民館には必要な姿勢になってくるのではないかと思います。これには様々な試みがあるのですが、私が関わっているものを二つご紹介します。

一つは、私の大学では、必修の教養科目で、実際に社会にどうかかわっていくかを育てるシティズンシップ教育が取り入れられています。パブリック・コメントやボランティア参加、デモやパレード、ネット上でのハッシュタグなど、興味関心に則した自分の意思表示や関与は、実は気軽にできる社会参加なのだと伝えていきます。

二つ目は、2019年度に平塚市と一緒に取り組んだ「地域に根ざしたESD推進プロジェクト」（ユネスコ事業）です。この最終報告会が、2021年度にモンゴル・フィリピン・ラオス・インドなどの人々と一緒に、オンラインで開催されました。ESDやコロナという同じ問題に対してそれぞれの国がどう取り組んでいるか、非常に深いレベルで繋がることができました。異文化理解というレベルを超えて、共に同じ課題に取り組んでいるという実感がありました。

ここから最後に考えたいのは、「地域に閉じない公民館のあり方」を、このコロナ禍を乗り越えた後に模索していきたいということです。これまでのような地域や生活の課題に取り組みながら、それをより大きな課題につないでいくという発想ができると良いのではないかと思います。大きな課題につながると、その問題には先に取り組んでいる人がどこかしらにいて、励みになります。

自分のところだけで課題をなんとかしようと思うと非常に難しいのですが、他の自治体であったり他の国で色々なアイデアや取り組みがあれば、明るい光が見えてくるという問題は実はたくさんありそうです。公民館は必要なんだ、大事なんだということを広く伝えていくために、生活課題や地域課題をより大きな共通課題に結び付けていくことが必要になるのではないかと思います。

あくまでも模索ですので、失敗したり頓挫したりすることがあるかもしれません。だからこそ、職場や地域の寛容さが必要です。そのあたりも含めて、地域に閉じない公民館のあり方を模索するというプロセスと一緒に入っていけるといいなと思います。

まとめ

最後、簡単にまとめます。

コロナをなかったことにしないために、コロナ禍での経験から公民館は何に気付いたのかということで3点に整理してお話しました。

「来館者中心の発想を問い直していく」、つまり、私たちは今まで誰を対象に公民館の活動をやってきたのかをもう一度問い直してみる。公民館の、あるいは、公民館職員の「自律的判断」について、自治体内の制度面や職員の力量形成の面から、課題として設定する。「地域に閉じない公民館のあり方」をもっと模索してみる。

改めて、この研究大会は「公民館が描く未来像を再確認し、今後のあり方を見出す機会として開催します」と説明されています。この未来像と現状のギャップを埋めるために、公民館はさまざまな取り組みを展開します。社会の未来像を実現していく役割の一端を、公民館に担ってほしいと思います。

この後の課題別集会では、コロナ禍での経験からご自身の気付きについて考えていただき、何を変えていけるのかを引き取っていただきたいと思います。研究で色々整理や調べることはできるけれども、結局「やってみる」というのは現場の実践でしかできません。実践から学び、実践を応援できる研究が今後もできるといいなと思っています。

質疑応答

Q：視点③「世界共通課題」のところで、「世界共通課題」から「地域課題」を考えていくべきか、「地域課題」から「世界共通課題」を考えていくべきか、ご教示いただきたい。

A：公民館の一番の強みは地域に立脚しているということなので、地域課題を考えていく中で世界との繋がりを探す発想のほうが、無理がないかなと思います。

Q：オンラインの活用により、市町村の枠を超えた取り組みが広がっている。今までの市町村主義から社会教育法の枠組みも変える必要が出てくるのか。

オンラインに依存する割合が低い高齢者の層とオンラインを積極的に活用していく層が混在していく。これらのことについて、先生のお考えを伺いたい。

A：公民館は市町村の設置であり、その住民のためにあるものという前提は大切にされるべきだと思います。オンラインで誰でも参加できるという部分はあっても、やはりその自治体の住んでいる人たちが対象であることは忘れてはいけない部分かなと思います。

また、これまで高齢者が若い人たちに昔の暮らしや遊びを教えるという方向が強

かったですが、最先端の世界共通課題については、子どもたちのほうが詳しいこともあります。世界の課題に取り組んでいく中では、世代間の学びの関係性が変わっていく可能性は大きいのではないのでしょうか。

Q：気づき②「公民館（職員）の自律的判断を育む」について、「市民の自律的・自主的な学び」を促すことと、関連があると感じたが、どう促していくことができるかヒントがあれば、ご教示いただきたい。

A：公民館の利用団体が、コロナ禍で活動中止や解散になるなど、そこには悩ましい課題があったと思います。住民の自律的・自主的な学びの基盤を作っていくためには、住民が自分たちの団体をどのように運営しているのか、公民館がその点をどのように認識しているのかを問うことが、最初の手がかりになるかもしれません。



（参考文献等）

- 池谷美衣子・大安喜一「世界的課題とコミュニティ実践を結ぶ」『日本公民館学会年報』第18号、2022.12.
- 日本公民館学会 2022 年度 7 月集会報告資料（「コロナ禍における公民館の運営をめぐる状況—政令市・中核市等全国 10 市での共同悉皆調査の展開—」）、2022.7.16.

第59回東京都公民館研究大会 第一課題別集会

明るい兆しの中で コロナ禍の公民館を振り返る

事例報告者 1	日野市中央公民館登録サークル NP	諸星智子	氏
事例報告者 2	日野市中央公民館 係長	大村国博	氏
事例報告者 3	千葉大学教育学部准教授	丹間康仁	氏
助 言 者	東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授	佐藤智子	氏

企画運営：日野市

失敗を恐れず チャレンジし続けよう！

事例報告者1：日野市公民館登録サークル NP 諸星智子 氏

私は10年程前から、母親が自分自身のことを考える為のサークル活動をしています。

活動当初は未就学児の母親が月に2回公民館の保育事業を利用しながら公民館に集い、悩みを話したり、講師を招いて学習会を開催したり、時には息抜きとして一緒に料理をし、食事を楽しむなどの活動をしてきました。

この活動は、子育てにかかりきりだった私達母親にとって、同じ立場の人同士、安心して他者との交流ができる貴重な時間でありましたが、新型コロナウイルス感染症の感染防止の影響により、集まって顔を合わせることが全くできない。という状況になりました。

1 ついに公民館も臨時休館

緊急事態宣言発令後、大人も子どもも共に外出できず、窮屈な生活を送る中「こんな時だからこそ、仲間と話しをしたい」と、オンライン上でテーマトークをするなどの内容から、サークル活動を再開しました。

何度かオンラインで活動してみると、時間の都合のつけやすさ、手軽に集まれる、オンラインでの交流の目新しさなどからオンラインサークルの魅力を感じ、「わざわざ公民館で集まる意味とは何だろう？未就学児の保育事業は有難いが、必ずしもサークル活動を公民館でしなくても良いのではないかな？」という疑問がわいてきました。（余談になりますが、子ども達が就園・就学し、手が掛からなくなり行動しやすくなっ

た現在、オンラインでのサークル活動は行っていない。）

私個人は、事務的・実務的な用件など、初対面・関係の浅い相手とのコミュニケーションにオンラインを活用することがあります。この事についても興味深く、機会があったら考えてみようと思います。

2 公民館活動について考えてみる

そんな疑問とモヤモヤを持ちながら、対面で集まったのサークル活動を再開した時、「同じ空間を共有し、相手の存在そのものから受ける影響の大きさ」などオンラインには無い魅力を改めて発見できました。が、「公民館で活動する意味」は見いだせないままでありました。

「公民館ではなく、サークルメンバーの自宅や地区センターなどの貸し館での活動でも、問題なく進められるのではないかな？」という考えも頭をよぎりました。

しばらく「なぜ公民館なのか？」という疑問を持ち続けていたが、ある時のサークル活動で「自分達は育児も少し落ち着き手が空いてきたので、子育てで忙しい他の母親の為に何か出来ることはないかな？」と、サークルメンバーの「できること・得意なこと」を持ち寄って「ママの為の自分時間」「ママのためのセラピーデイ」という企画を公民館と共同で開催しました。

（内容は、各種マッサージのブース、元カメラマンの母親が写真撮影をするブース、アロマや色彩を利用した心身状態チェックのブースなどを自由に利用してリフレッシュ

してもらおうという主旨です。)

新型コロナウイルス感染症の蔓延以降、講師にオンラインで参加してもらおうという方法が増えたのは Wi-Fi 設備のある日野市中央公民館の特徴です。

3 一緒にイベント参加

このイベントの開催準備期間から、企画を後押ししてくれる公民館職員の協力に非常に助けられました。

例えば公民館で主催講座を開催する際、何からどのように始めたらよいのか分からない私達に、ひとつひとつ手引きし、ちょっとした気付きなどの相談にも毎回丁寧に応じてくれ、サークルと公民館職員が一緒にイベントを作り上げたこと。また、必ずしも結果を伴わずとも、市民は自ら企画を提案すること自体に価値を見出し、「大丈夫、大丈夫!」と、優しく背中を押してくれる様な対応などでした。

それらは講座開催に向けての助け・励みとなり、とても有り難かった思いです。

私達のサークル仲間は「何かに挑戦してみたい!」と思ったら、まずは公民館へ。」という認識が芽生えました。

当時一緒にセラピー企画をした仲間は、自主講座での挑戦をきっかけに、その技術を職業として活かし現在は社会で活動しています。他にも、元漫画家の母親が開催するイラスト講座を企画した際も同様、公民館職員の協力、イベント告知の為の情報発信面で助けてもらいました。

その講師は、現在も引き続き公民館でイラスト講座を開催し、更にその講座は PTA 企画の学校行事にも発展しています。

公民館職員とサークル(利用者)共同での小さな活動の1歩が、次の1歩、2歩へと繋がった事例です。

失敗を恐れずチャレンジし続けられる。それが私達にとっての学びのひとつであり、それができる場が、私達にとっての公民館であると思っています。

4 最後に

我が家の子ども達は、第一子は2歳前から、第二子からは生まれた時から公民館に通っています。乳幼児期から、保育事業を利用し子どもは保育、親は自分のサークル活動と、館内で別々にそれぞれの時間をすごしてきました。

その影響もあってか、就学により保育を利用しなくなった現在も、親が公民館で予定がある際「家で一人で留守番をするのは嫌だから、(公民館の)談話室で待っていたい。」と、提案する時があります。

子ども達にとって日野市中央公民館は、保育事業で通い慣れた場でもあり、職員の方々に声をかけてもらい、遊んでもらった経験のある安心して過ごせる場になっています。

こんな点も、日野市中央公民館の魅力のひとつだと思っています。

そんな公民館との関わりのなかで、今後私が取り組んでいきたい事ののひとつは、他のサークルとの交流です。

以前は、サークル交流会や利用者の発案ではじまった年末の大掃除イベントなどサークルごとに交流を持つ機会がありましたが、残念ながら、新型コロナウイルス感染症蔓延の影響でその機会は失われてしまっています。

他人との関係が希薄になりがちな今、豊かな社会にとって必要、重要なものとは何か?を、公民館での活動から現在も模索している最中です。

コロナ禍で見えてきた課題への挑戦！

事例報告者2 日野市中央公民館 係長 大村国博 氏

1 門を閉ざす中央公民館

令和元年末の新聞などで中国の武漢で大変なことが起きているらしい、ということを生々しく伝えたのはテレビでも新聞でもなく Youtube でした。

それからあっという間に日本にも広がりだした新型コロナウイルス感染症により瞬く間に学校や公共施設が閉鎖され、中央公民館も臨時休館となりました。

公民館のもっとも得意な、また武器でもあった対面によるコミュニケーションが封殺され、全ての公民館事業を停止せざるを得ませんでした。自分が公民館に赴任してから2年目で「公民館の学びとはなんだのか」ということを振り返る日々がやってきました。

2 Withコロナの中での試行錯誤

必要に迫られる形で、デジタルネットワークを利用したコミュニケーションを意識することになりました。Youtube 上では当時、様々な新型コロナウイルス感染症対策についての興味深い情報が毎日のように溢れていました。この情報をより多くの方に閲覧できるように公民館公式ツイッターに掲載し、拡散していこうとしましたが行政が表立って Youtube 情報を流すのはよろしくないという判断があり、この試みは断念しました。

けれどもこの頃から生涯学習支援におけるインターネットの有効性を意識し始めることになりました。

3 地域のパートナーとの協働

公民館に隣接している中央福祉センターには日野市社会福祉協議会（以下「社協」と言う。）・ボランティアセンターの事務所があります。社協は市の中でも常に先駆的な事業に取り組んでいます。そのスタッフから「Zoom を活用した講座をやってみませんか。」という誘いがありました。しかし、当時の公民館にはそのノウハウや機材がないことを伝えると、互いに業務分担し共催しましょう、ということになりました。

先駆的に動く団体の協力を得たことで、公民館講座にもインターネット活用のオンライン配信を試みることができるようになりました。また、公民館事業「ひの市民大学」の企画運営委員からも、対面で会議ができないなら Zoom 会議をやりましょう、との呼びかけがあり、オンライン会議にも参加することになりました。

4 地域課題に取り組むための新たな試み

（1）学びにインターネットを！

以前から大学のカリキュラム「生涯学習概論」の中では、社会教育がインターネットを活用した学習に取り組むことは必須であると説かれていました。しかしながら、当時の公民館職員にそのような発想や知識がなく、また、市の財政状況から公民館に Wi-Fi 設備等を設置することはかなりの難題でした。しかし、令和2年度に国の「地方創生臨時交付金」が活用できることになり、

日野市の生涯学習支援にインターネット活用の道が開くことになりました。

（２）社会教育施設の ICT 推進—

「たま学びテラス事業」の開始

令和２年度の後半期に、東京都市長会の「多摩・島しょ広域連携活動助成金」の申請をすることになりました。

この制度は、地方自治体の課題である他市との広域連携活動への取組みに対して補助をしてくれる制度です。

日野市は「諸力融合」の合言葉の元、他団体と連携しての地域課題解決を推奨されているまちです。それまで公民館が主導して他市とつながる発想はありませんでしたが、ダメ元でやってみよう、ということになり、隣接する多摩市の公民館に協働事業の提案を投げかけてみました。

幸い、日野市の事業パートナーから ICT 指導をしてもらうという展望があり、多摩市関戸、永山の両公民館も Wi-Fi 設備の必要性は大いに感じていたため、ICT の充実が見込めるのなら協働しましょう、と合意を得ました。

また、互いに多摩地域という視野で広く人材や自然、歴史などの社会的資源を共有できる可能性に魅力を感じたことも合意となった理由の１つでしょう。話を進めていく中で、２市が行っている大学連携事業をキーにして連携事業の形を作っていました。令和３年度には以下の事業を骨子として実施することになりました。

主な事業を以下に挙げます。

① ICT 活用による市民大学事業の連携体制の構築

２市の「市民大学事業」に、それぞれの市民が参加できる仕組みを構築

a 日野市

「ひの市民大学：明星大学連携コース」

b 多摩市

「関戸地球大学院」

② ２市の社会的資源を活用した体験型講座等の構築

スマホアプリ「まちクエスト」を活用して、２市を結ぶ川崎街道の歴史等の学習をする、「川崎街道今昔クエスト」まち歩き講座を実施

③ 市民の学習成果発表の情報発信強化 市民が動画制作できる機材等を整備し、動画制作講座（初級）を実施

２年目となる令和４年度現在、多摩市との広域連携事業では職員同士が事業状況など気軽に情報交換したりできる雰囲気となってきました。

そして、このような連携に必要なのは、「職員の得意なことから始める」、「情報共有を十分に行う」ことが大切であると感じます。２市の職員間では、このゆるやかな社会教育のネットワークを、多摩地域全体に広げたいという思いが育ってきています。

（３）デジタル格差解消に挑む～日野市シニア ICT 支援事業～

① スマートフォン使い方講座

コロナ禍において市庁内に PT が発足しました。この PT では、コロナ禍で行政職員は何をすべきかを検討し合いコロナ禍で外出困難になった高齢者のデジタル格差解消を目的とした「スマートフォン講座」を取り組みました。中央公民館はその後を引き継ぎ、

定期的に「スマートフォン使い方講座」を開催することになりました。

② スマホお助け隊養成講座

当該事業では、地域福祉の専門家である社協と相談をしながら、「市民がスマホ講座で教える技術を学び、高齢者に基本操作を伝えるような講師を養成する仕組みを考えよう。」という目的で企画することになりました。

福祉系の関係団体などとの会議を開き、受講者のニーズを共有し合いながら、内容を詰めていきました。

そして令和2年度末にトライアル事業「スマホマイスター養成講座」を開催するに至りました。市民から大きな反響をいただき、令和3年度からは連続講座として開催し、その講座から誕生した市民講師の皆さん「スマホお助け隊」は現在も活躍中です。

③ 今後の課題

行政の関係各課が実施を始めた「日野市シニア ICT 支援事業」は、高齢者デジタル格差解消事業と融合し、令和3年度から5年度の3か年事業として現在も実施中です。その間、市の中小企業応援事業である「Paypay キャンペーン」の後方支援を行うことができました。

関係団体等の会議では「スマートフォン使い方講座に参加しづらく地域の高齢者は取り残されている。」という課題が出されました。そこで、今後は地域のニーズを捉えて、地域に密着したデ

ジタル格差解消対策を行う予定です。師の皆さん「スマホお助け隊」は現在も活躍中です。

5 公民館利用者と職員の思いの融合

日野市中央公民館は、直接の対話を封印されながら令和2年度からのコロナ禍、そこから生じた新たな地域課題に取り組むべく、慌ただしく活動を続けてきた3年間ではありましたが社会教育の現場にICTを導入することができたのは大きな成果です。

また、高齢者のデジタル格差解消、広域連携活動などの事業を展開できました。それは他団体とそれぞれ得意なことを提供し合いながら、連携しあった成果だと思えます。

しかし、何よりも忘れてはならないのがこの3年間の厳しい状況に耐え、学びを忘れなかった市民の方々からの協力と励ましです。我々には何もできないのか、と言う不安もこの励ましがあったからこそ、払拭することができ、公民館を利用する市民との絆はコロナ前よりも深まったと感じています。その中で、公民館は対面学習とオンライン学習という二つの手法を手に入れ、新しい公民館を創る可能性を手に入れました。

今後はこの手法を活用し、コロナ禍によって停滞してしまった市民の学習環境の復活をしなければなりません。これからも失敗を恐れずチャレンジを続けながら、市民から頼りにされる公民館を目指していきたいと考えています。

コロナ禍で公民館と大学の連携を探る

一開かれた学びを目指して一

助言者：千葉大学教育学部准教授 丹間康仁 氏



事例報告者 丹間康仁氏

1 コロナ前からの連携を続ける

本報告では、コロナ禍での公民館と大学の連携の可能性について、筆者の取り組みを紹介します。筆者は大学で社会教育・生涯学習の分野を担当しています。授業やゼミで地域の公民館と関わり、学生とともに学ばせていただく取り組みを進めてきました。

初めに、コロナ禍以前からの連携を振り返ります。日野市中央公民館との連携は、思い返せば2017年の公民館まつりへの参加でした。公民館まつりでは、学生たちが来館者の方々に話を聞いたり、市民や職員と大きな輪を作って一緒に踊ったりして、賑やかで明るい交流ができました。

公民館まつりで生まれたつながりを生かし、その年の夏以降、学生は利用者の方に「公民館とあなたの出会い」というテーマでインタビューをお願いしました。公民館と初めて出会ったきっかけなどを振り返ってもらい、今の活動や今後の展望などを学生の視点から尋ねました。こうした対話の

結果を学生がエッセイ集として冊子にまとめました。

しかし、そういった活動がコロナ禍で大きく揺らぎました。新型コロナウイルス感染症をめぐっては、当初、ステイホームの呼びかけがなされたり、テレワークや遠隔授業の推進、はたまた臨時休業なども行われたりしました。公民館においても、2020年2月末から全国で学校が一斉休業する中、5月、6月まで臨時休館した例が多かったようです。

市民の生活が一変した状況下で、大学のゼミもzoomを用いて行わざるを得ませんでした。コロナ禍の初期、例年のような連携は難しいと考えていたところ、ある学生の言葉にハッとさせられました。

「利用者の方たちって今どうしているんですかね？」

そこから学生と、私たちに今できることは何かを考えました。今だからこそ、公民館の果たす役割があると確信しました。その1年前、学生は公民館まつりで市民の方たちと出会っていました。学生からすれば、あの時、あんなに楽しく生き生きとしていた市民の方々が、このコロナ禍で大丈夫だろうか心配にもなったのでしょう。やはり関わりを止めてはいけない。新たな形で連携を作っていきたいと考えました。

そこで学生と話し合い、「皆様、お元気でお過ごしでしょうか？」という思いで、メッ

セージを寄せ書きにして送りました。まだ登校ができない時期ではありましたが、各自が書いたメッセージを写真で撮って送合い、パソコン上で寄せ書きにしました。さらに双方向の関係が生まれればと、アンケートも送ることにしました。実施にあたって4月末に公民館に電話で相談すると、ちょうど同時期に館長が利用者に手紙を送ろうとしていました。思いは重なるものです。その手紙にメッセージやアンケートを添えて頂き、コロナ禍での2020年度の取り組みが始動しました。

返送されてきたアンケートの声をきっかけに、2020年度は電話やzoomを活用してインタビューを実施し、この年もなんとか冊子がまとまりました。コロナ禍に向き合いながら、学び続けようとする市民の姿を描くエッセイが多くなりました。学びを止めない人生の先輩方の姿に、学生は勇気をもらったことと思います。

この取り組みは2021年度、2022年度も続け、私が受け持つ他大学においても取り組みを広げ、利用者はもちろん職員の方にもインタビューをしました。近年は電子書籍の広がりもみられることから、中央大学で作成した1冊は、「TAMA eBooks～多摩地域の暮らしに役立つポータルサイト～」にも掲載していただいています。

2 コロナ禍で新たな連携を築く

次に、コロナ禍での二つのチャレンジを紹介します。

一つ目は、オンラインで公民館と大学を繋ぐものです。コロナ禍も2、3年目になると、大学も対面授業を再開しました。そこで、公民館と連携した活動を何とか取り戻していきたいのですが、以前のように公民館に皆で揃ってお邪魔する形は採りにくい

状況でした。

そこでオンラインを活用し、一部学生が公民館に取材班という形でお邪魔し、他の学生は教室から中継で参加する取り組みを試みました。現地では、学生がタブレットやマイクを持ち、館内見学、レクチャー、インタビューなどを教室に配信しました。

つまり対面方式とオンラインの組み合わせです。このコロナ禍で、大学にはカメラやスピーカーフォン、zoomをはじめ、オンラインの設備や環境が十分に整いました。学生が毎週担当を決めて交替で複数の館を取材したり、授業の合間など遠出できない学生は、大学に居ながらにして公民館の見学やインタビューを実施したりする方法により、オンラインを代替手段として使うのではなく、新たな開発手段として取り組んだ一例です。

第二に、集団を小規模化した分散見学の実施です。明星大学で生涯学習論を履修する学生は400名を超えます。コロナ禍以前であれば大教室が満員になります。しかしコロナ禍においてはオンラインで授業を実施していました。

そんな中、学生に公民館をリアルに知る機会を用意したいと考えていました。400人規模での公民館の見学など到底考えられませんでした。コロナ禍で行われた学校の分散登校がヒントになり、小さい集団に分散することで見学の可能性を探りました。日野市中央公民館の全面協力の下、400名を1～4名の小グループに分け、各枠30分間の見学を1日あたり11枠の計30日間で実施しました。学生は都合の良い日時をwebで予約し、入れ替わり見学する形です。

見学にあたってはスカベンジャーハントという方式を採用し、公民館に集まった学

生は、「ミッションシート」を受け取り、そこに書かれた問題や課題を館内外でクリアするものです。問題は公民館職員に作ってもらいました。例えば、「激励文に公民館は地域の何と書いてありますか？」という問題について。答えは、地域の「太陽」。コロナ禍で将棋サークルから公民館に届いた激励文を館内で見つけて答えます。他にも、玄関の木工看板を作成したサークルの名前を答える問題、屋外にできた新たなテラスのネーミングを投票する課題、水槽のメダカの数に答える問題など、シートにしたがって、学生たちは次々とミッションをこなしながら公民館を見学していきます。

その中で、「公民館のここがイイね！」をスマートフォンで撮影するミッションと、「公民館ってこんなところ！」を一言で書いて表現して撮影するミッションがあります。学生たちは、実にさまざまな角度と着眼点で写真と言葉を提出してくれました。集まった画像は800枚近くに上り、これらを巨大なモザイクアートにして、公民館で展示していただきました。

モザイクアートは、離れて見ると公民館をモチーフにした一つの大きな絵になっていますが、近づいて見ると、小さな一枚一枚のタイルが見えてきます。そこには学生のとらえた「公民館のここがイイね！」「公民館ってこんなところ！」の写真と言葉が所狭しと並ぶものです。見学がゴールではなく、見学をきっかけに次の来館につなげる。展示を見に行くよう呼び掛けたり、若者向けの事業を紹介したりもしました。

3 これからの連携に向けて

最後にこれからの連携に向けた三つの提起をして、報告のまとめに代えます。

一つ目は、「本物との出会いを仕掛けよ

う！」ということです。

公民館には魅力的な人が集まっています。学生には、色々な人と出会ってほしいです。地域で生き生きと活動する市民の方々と、公民館のことをまだ知らない学生たちの出会いを仕掛けていくことが基本です。幼少期から公民館に通っていた学生は稀です。授業で初めて公民館に行ったという声も少なくありません。仕掛けていくことが大切だということです。

二つ目は、「良さと持ち味を交換し合おう！」ということ。インタビューでの引き出し方、エッセイの書きぶり、スカベンジャーハントでの写真や公民館を表現した一言など、若者の感じる力はなかなか真似できるものではありません。直感力、センスがあります。私たちが思いもよらないような発見をしてくれます。この若いからこそ感じる力を生かせるような取り組みを考えることが大切です。

また、公民館の利用者の方々は、活動に対して本当に熱意を持っています。そしてコロナ禍で特に大事だと感じたのは、一緒に学んでいる仲間への思いです。

これらをお互いの良さとして触れ合い、価値観を交換し合えることを望みます。利用者の方がサークル活動の中では気づかないようなことが、学生との対話の中で見えてきたり掘り起こされたりすることもありました。良さと持ち味を生かし合えるような取り組みを考えていきたいです。

三つ目は、コロナ禍が出口に向かっていく中で、対面方式に完全に回帰していくかといえば、決してそうではなさそうです。やはり、代替手段ではなく開発手段として、オンラインも有効活用していく。学校との連携には小・中学校、高校なども含まれます。学校では一人一台のタブレット端末が配備

されましたが、他方、社会教育施設の公民館はどうでしょうか。コロナ禍で、直接会うこと、集うことの大切さを噛みしめたのはむしろ大事な経験だと思います。しかしそれに留まらず、オンラインの整備を考えていかなければ、学校側のICT化に取り残されてしまう。コロナ禍でオンラインの力を身に着けた公民館もあるでしょう。オンサイトでもオンラインでも、両方をうまく組み合わせつつないでみるのが、これまでの公民館に風穴を開けるでしょう。

最後に、コロナ禍を失われた時間にしてください。公民館の歴史の中で、コロナ禍もいつの日か歴史の一ページになります。辛く苦しい時期でしたが、次につながるものがあり、得るものがあった。そういえば、そうしたいと思っています。そうした思いを公民館と大学で共有しながら、次なる一ページに学び合いを切り拓いていきたいと考えます。



事例報告者 丹間康仁氏

コロナ禍で見えてきた公民館の課題と今後の可能性

助言者：東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授
佐藤智子 氏

1 公民館の限界を知り、可能性を拡げるために

この第一課題別集会は、「明るい兆しの中で～コロナ禍の公民館を振り返る～」をテーマに掲げています。今回の私の役割は、テーマにあるように、第1に、コロナ禍に直面した中で見えてきた公民館の課題や限界を明らかにすること、第2に、その課題の解決に取り組む実践的な挑戦の中から見えてきた公民館の可能性を整理することと認識しています。

ただ、これらに答えるためのヒント、あるいはその答えそのものが、すでに本日の基調講演及び事例報告の中に、十分に示されていたように思います。基調講演の中では、「来館者ありき」であった従前の公民館の限界に言及されていました。つまり、実際に近隣住民等が公民館に来ることを前提として、あらゆる事業や活動が組み立てられてきたことへの問題提起です。これは別の見方をすれば、「非来館者には何もしない（できない）」ことを、しばしば無自覚に、時に無批判に受け入れてしまっていたことを意味します。

コロナ禍に直面した公民館の中で、少なくとも公民館が「休館」を迫られることになりました。しかし実際には、完全に対住民サービスを停止した公民館と、住民が来館できない中でもICT等を駆使して新しい活動を展開した公民館とが存在しました。両者を

分かつに至った要因を分析するのは引き続き今後の課題ですが、重要な要因の1つとしては、公民館職員や公民館を利用してきた住民の皆さんが「正解のない困難な課題状況」に果敢に挑戦し考え続ける姿勢や意欲を持っていたかどうかに加え、その挑戦の基盤となるコミュニティやネットワークを持っていたかという点も重要であると思います。



2 各実践報告によせて

次に、各事例報告において示された、公民館の「可能性」について整理してみましょう。第一報告（諸星氏）では、サークル活動での経験を基に、コロナ禍でのオンライン活動について言及されました。その中で、オンラインでの活動の利点として、時間の都合のつけやすさ、手軽に集まれる、オンラインでの交流の目新しさなどが紹介されました。

「わざわざ公民館で集まる意味とは何だろう？」と疑問を感じたというお話がありました。

私たちが考えるべき大きな問題の1つは、まさにこの点です。住民の皆さんが自発的に社会教育活動（サークル活動など）に取り組む上では場所さえ確保できればよく、それが「公民館」でなければならない理由は実のところほとんどないのかもしれませんが。これは「公民館とは何か」という問題と共に、実は半世紀も前から議論されてきたことでもあります。報告の中では、公民館が公民館としての存在意義を持つ上で、職員の役割が重要であると示されました。以上をふまえ、公民館の「課題」としては、次の2点を確認できます。その1つは物理的な場所や空間としての公民館施設ではなくとも社会教育活動は十分に実現可能であり、状況によってはその公民館施設以外の場で活動するほうが利点の大きい場合もあるという点です。もう1つは、公民館職員の役割とは何であるべきであり、その役割をどのような方法で実現・達成すべきなのか、という点です。

続く第2報告（大村氏）では、コロナ禍が顕在化させた諸課題に公民館職員としてどのように挑戦し、どのように解決に向けて実践し、また今後の公民館像をどう描いたのかについて述べられました。この報告の中で印象的だったのは、公民館がコロナ禍前から持っていたネットワークを意図的あるいは偶発的に活用し、非常に効果的に諸問題を乗り越えてこられた姿です。また、各団体・個人の特性（得意なことは何か）やポテンシャル（これから何ができるか）をうまく引き出してこられた点も特筆すべきです。

最後の第3報告（丹間氏）では、大学教員の立場から、公民館と連携した大学教育実践（あるいは大学教育と連携した公民館実践）について紹介されました。決して、一方が主導して他方はお手伝いをするとい

うのではなく、双方ともが主体的に関われる関係性と学習環境デザインを具体化している点で、まさに公民館の在り様を実践的に体現されているように感じます。また、大学の授業というフォーマルな教育の場に社会教育の要素を無理なく融合し、深い学びと学習者の高いモチベーションを両立させる工夫、特に楽しくその学習活動に取り組むことのできる仕掛けを凝らしていました。

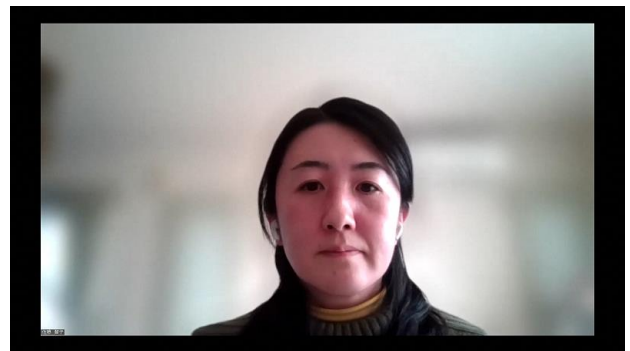
以上のように、こちらから「助言」を提供するまでもなく、各公民館あるいは各公民館利用者の皆さんの実践に、多くのヒントがすでに存在しています。公民館の「可能性」を探ろうとする挑戦において、まずは「すでに私たちは何を知っていて、どのような資源を持っているのか」を自覚するところから始めることが重要です。

3 21世紀型の公民館のあり方とは

ニューノーマル時代を迎えた私たちは、未来の公民館のあり方について構想し、それを具体化していく必要に迫られています。この点を考える上で、兵庫県尼崎市の新しい「公民館」を事例としてご紹介しましょう。尼崎市では現在、生涯学習と自治のまちづくりの拠点として（設置条例第2条より）、12館の「生涯学習プラザ」を有しています。現在の「生涯学習プラザ」は、その設置条例によれば、社会教育法第21条（公民館）ではなく、教育基本法第12条（社会教育）の規定に依拠して設置されています。この「生涯学習プラザ」の構想においては、長野県飯田市の公民館のあり方に強い影響を受けています。つまり「生涯学習プラザ」は、従前の都市型公民館とは大きな相違点を有するものの、「尼崎版」公民館として、ニューノーマル時代の、伝統的かつ革新的な公民館のあり方を体現しています。

尼崎市の実践で重視されている方向性として、主に3点が指摘できます。第1に、「みんなが地域のセンセイ」であり、「まち全体が学習の場」と捉えているということです。つまり、国家公認の専門職や高い社会的地位を持つ人だけが「学びを与えてくれる人」ではなく、地域に住むすべての人が地域についての「専門家」であり、その地域について知る上で欠かせない知識や経験を保有していると認めることです。このような枠組みでは、必ずしも「公民館施設の中」が最適な学習の場ではありません。例えば、地域経済について考える上では、むしろ商店街の中の利用可能なスペースで学習機会を設けたほうが有効な場合もあります。また、住民の中には、公民館に足を運ぶこと自体が難しい状況にある人もいるでしょう。そのような場合には、住民にとってアクセス可能な場所に学びの場を創ることを考えるべきです。つまり、学習の場を、それぞれに独立した「点」や「面」として捉えるのではなく、点や面が相互に結ばれた「ネットワーク」として捉える必要があります。第2に、あらゆる住民の持つ知識やスキル、経験を活かして学習を深めていくためには、「対話」が重要であるということです。あらゆる住民は地域の専門家だと上記で書きましたが、しかし多くの住民はそのことを自覚しておらず、またそこにある知は言語化されない限り共有することもできません。第3に、特に社会や地域へと成果を還元していくための学習には持続性が不可欠であり、その持続性を生む条件として「楽しさ」が有効だという点です。私たちは誰も「辛い」「苦しい」「我慢を強いられる」ことは避けたいはずですが、逆に「楽しい」「面白い」と感じられれば、無理をしていると感じずに活動が続けていけるに違いありません。

以上のように、学習環境をまち全体に張り巡らされた「ネットワーク」として捉え、そのネットワークの質をより良好なものとしていく必要があります。そこでは「対話」を効果的に生み出す環境の整備こそが、公民館に期待される役割となるでしょう。そして、その「対話」の機を見極め、より深い学びへと誘い、学びの過程がより楽しくて持続可能なものとなるようにリーダーシップを発揮するのが、公民館職員としての重要な役割ではないでしょうか。



助言者 佐藤智子氏

第 59 回東京都公民館研究大会 第二課題別集会

地域に広がる・つながる公民館になるためにどうしたらよいのか

助言者 東京学芸大学教育学部准教授 倉持伸江 氏

事例報告者 国分寺市立第九小学校長 矢島英明 氏

なかまちテラス仲町公民館長 中村和幸 氏

長崎県長崎市北公民館長 出口亮太 氏

会場 小平市福祉会館

企画運営：国分寺市

地域に広がる・つながる公民館になるためにどうしたらよいのか

1 はじめに

まずは、助言者の倉持伸江氏からの趣旨説明。

第2課題別集会では「地域に広がる・つながる公民館になるためにはどうしたらよいのか」をテーマに、3つの具体的な事例を聞き、職員、公運審、市民などそれぞれご自身の立場に引き付けて考え、どうすれば地域にひろがり、地域とつながるかを各グループでディスカッションしていただく。また各自持ち帰って活動などに生かしてもらえることを本日の目標とする。

事例報告①「学校との連携から広がる公民館」は、校長先生の立場から公民館とのつながり・関わりに期待すること。

事例報告②「公民館事業への市民参画から地域づくりへ」は、地域とつながる様々な活動・事業をしていく上で、市民や利用者の参加・参画をどのように取り組まれているか、職員の立場から見てどのように苦労して、また問題意識を持っているかなど。

事例報告③「公民館に地域の“いま”を実装する～長崎市北公民館チトセピアホールの事例を通して～」では、オンラインを利用した新たなつながりについて。やらなければならない、大事だと思っはいても中々難しいオンラインの活用について、チトセピアホールでは実際どうしているのかと、どのように活用していったらいいのかを。

本来であれば1時間の内容を15分に凝縮して話していただく構成となっている。

2 事例報告① 学校との連携から広がる公民館

キリンを冷蔵庫に入れるにはどうしたらいい

いでしょうか？そんな問いかけで見方を変えることの大切さからスタートした事例報告。因みに正解は「冷蔵庫のドアを開ける」。



国分寺市立第九小学校長 矢島英明 氏

(1)九小の子は、恋ヶ窪公民館のヘビーユーザーですから

かつて学級担任をしていた頃は、「子どもが公民館で遊んでいては困る」という連絡が学校に入って謝罪した経験もあり、「公民館は大人が学びを深める場所だ」と小学校とは遠いものだと感じていた。

東京都国分寺市立第九小学校と同じ敷地内にある市立恋ヶ窪公民館は、学校との様々な連携はもちろんのこと、放課後に館内で児童たちが宿題やゲーム、おしゃべりなど自由に過ごしていて、大人もそれをにこにこ見守っていた。それを見て衝撃を受け公民館の見方が変わった。



※第九小学校創立50周年記念写真展の様子(第九小学校コミュニティスクール協議会と恋ヶ窪公民館共催事業)

(2) 公民館は大人も子どもも学べる場所だ！

大人と子どもが物理的に一緒の場にいる

ならば、これからの公民館は大人と子どもが互いに学び合える場所だと思う。

学校指導要領では、「一人一人の児童が、自分のよさや…（中略）…多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え…（中略）…持続可能な社会の創り手となる。」とある。

これまで自分は学校の中だけで完結させなくては行けないと頑張っていた。しかし、同質的な集団の究極である学校の中では多様な考えが出てこない。社会に開かれた教育課程が必要であり、主体的・対話的で深い学びが大切である。多くの人とつながりながら体験的に学ぶことが大事だと感じた。



第九小学校児童による恋ヶ窪公民館 50 周年記念横断幕

(3) 学びの循環の拠点

指導要領が全面的に実施される令和2年度、学校はコロナで閉ざされていてつらく悲しかった。これまでやろうとしたことがだめになってしまった。

その翌年度コミュニティスクールの委員から赤米について学んでいる公民館の自主活動グループとの連携した授業の提案を受け、公民館の橋渡しによりそれを実現することができた。「赤米を栽培しよう！」という4年



公民館活動グループ「赤米セミナーレ」との活動風景

生の総合的な学習の時間で、赤米セミナーレというグループから赤米の育て方や歴史、石包丁を使った収穫の知恵などを学んだ。

子どもたちが、大人が学んだり、趣味を楽しんだりしている様子を直接見聞きできることが大事。他方で、子どもたちの遊びやおしゃべりを身近で見聞きできることも大事。大人から子どもへという教示的な学びにとどまらず、子どもから大人へという学びが展開できるのが公民館だと思う。

公民館には、いろんな考え、趣味、楽しみを持った人が集まる多様性と、そういう大人を見て育った子供がまた戻ってくるという持続可能性がある。これからの公民館は、社会を生きる子どもたちの育成拠点、学びの循環の拠点になると思う。

そして、教員や公民館利用者の公民館に対する見方を変えていくことも大事。他方で学校も敷居が高いと思われる。是非とも公民館から「こういうことをやりたい！」「一緒にやりませんか。」と飛び込んで来て欲しい。

3 事例報告② 公民館事業への市民参画から地域づくり

東京都小平市のなかまちテラスは、平成27年3月に人と情報の出会いの場を基本コンセプトに新設された、仲町公民館と仲町図書館を含む複合施設。世界的建築家〈妹島和世さん〉が設計した斬新なデザインで、その名称は公募で決まった。



なかまちテラス仲町公民館長 中村和幸氏

（1）なかまちテラスの連携協働の形

開館前から複合施設としての活用方法について地域の方が集まり、1年間話し合いを重ねた結果、新しい連携・協働の形が必要ということになり、“なかまちテラスLiNKs”が立ち上がった。複合施設の特長を活かし、なかまちテラスLiNKsとの協働による独創的な事業を展開してきた。

また、地域のコミュニティづくりの拠点として公民館を機能させるため、市は、市民が事業企画に参画する“なかまちテラス事業企画委員会”を平成27年に設置。「市民が教え市民が学ぶ」地域と連携した取り組みを展開している。この2つは連携協働の欠かさない柱。



（2）なかまちテラス LiNKs

LiNKsとは、次の5つの単語の頭文字から取ったネットワークのこと。

Library・・・図書館

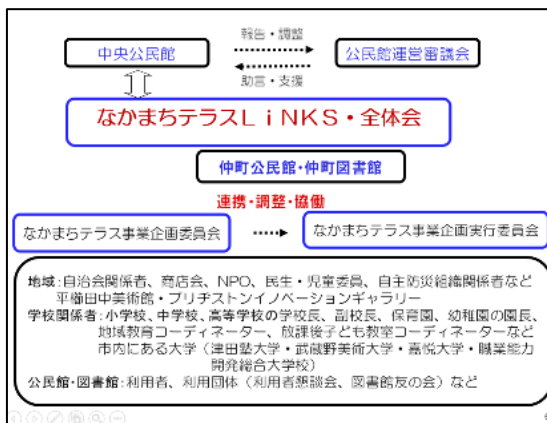
i・・・私

Nakamachi・・・仲町を中心とした市民

Kominkan・・・公民館

School・・・学校

LiNKs のイメージは下図のとおり。



なかまちテラス LiNKs 全体会は、年5回開催。事業企画委員会で検討している講座の進捗状況や図書館事業など必要なテーマに沿ってグループに分かれて話し合う場。関心ある方はどなたでも参加が可能。

なかまちテラス事業企画委員会は 15 人で構成され、公民館の事業の検討を行っている。

（3）実際の事業の紹介

① なかまちテラスだより

なかまちテラスから地域の情報発信というコンセプトで、LiNKs のメンバーが地域や学校から集めてきた情報や公民館・図書館の情報を掲載し、四半期ごとに発行。

② なかまちテラスイルミネーション

市内の職業能力開発総合大学校の先生・学生、市民が連携し施設壁面に電飾を施す事業で、毎年 11 月～2 月に点灯。

③ なかまちテラスギャラリー

コロナ対策として、「なかまちテラスまつり」の代替えで、規模を縮小し展示を中心の内容で実施。これまでスペースの状況で十分に展示ができなかった団体も展示ができ、喜ばれた。

④ その他独創的な事業

・世界でひとつだけのデジタル絵本をつくろう

・東京五輪 英語で小平の魅力を紹介

・演じて・歌って・踊って心も身体もリフレッシュ

・小平市の文化を巡る 知る 学ぶ

・なかまちテラスまつりワークショップ

（4）なかまちテラスティーンズ委員会

LiNKs の発案から、地域の中高生が主体的になかまちテラスに関わる場として平成 30 年に立ち上がった。中高生の読書不足解

消となかまちテラス利用促進を目的に、年6回の会議で同世代に読んでもらいたい本を選考し、大賞を決定。図書館事業に移行。



（5）開館当初から関わってきて

公民館は市民と距離の近い関係性が築ける貴重な職場。人事異動により長年培ってきた市民協働の場が壊れることが無いように引きついでいく必要性を感じている。

LiNKSは、軌道に乗ってきたが、コロナ禍を経て新たな節目に来ている。興味を持って参加いただける人をいかに増やすか検討が必要。他方、企画委員会は2年ごとに2、3人の入れ替わりがあり企画の目的にあった構成になってきた。なかまちテラスに関わってくれる方と連携し、今後も課題に取り組み、なかまちテラスが地域に根差した存在になるよう努めていきたい。

4 公民館に地域の“いま”を実装する ～長崎市北公民館・チトセピアの事例を通して～



長崎県長崎市北公民館長 出口亮太氏
長崎市北公民館が全公連の優良公民館優秀館を受賞し、授賞式後その足で来ていただきました。

（1）インターネット中心へ

北公民館の動画活用例として、バラエティ

に富んだ YouTube チャンネルの仕掛人である講師のVTRを再生。

コロナ禍で開催できなくなった講座を館長自らが撮影・編集し、動画で配信。講師のアシスタントもこなす様子も流れる。

ももとは、公民館もある施設の3階にあるチトセピアホールで、毎月、自治体予算に頼らない独創的な自主事業を行うことで全国的に知られていた。指定管理者制度導入に伴い公民館長に就任したタイミングは、まさにコロナ禍の始まり。利用人数の制限、講座の中止、度重なる臨時休館。利用が半分以上に落ち込み、次の手をどうするかと考えた時に、インターネットを中心にやっていくことにした。

月刊「長崎市北公民館」のバックナンバーすべてをHPに掲載。北公民館 YouTube チャンネルでは50の動画を配信しているが、公民館利用者限定の動画もあり、利用者にとっての安心感もある。例えば、無観客で行った北公民館の学習発表会の動画は出演者のみにQRコードを配布。こういった配慮も評価され、全国公民館インターネット活用コンクールで金賞を受賞。

全国の公民館が抱える難題である利用者の高齢化と固定化に対しては、HPのアクセス状況をGoogle Analyticsで分析することで解決の糸口を見出した。

25～44歳の女性がいちばんHPをご覧いただいている層。この層は、公民館の利用者になりうる、そして子育て中の方が多いとの想定の下、冬休みには親子で参加できる講座を充実させた。ポップな募集チラシを近隣の小学校に配布し、チラシのQRコードから気軽に申し込めるようにしたところ、HPのアクセス数もぐっと伸びた。

結果、講座「北公民館の冬支度」は、3週間の募集期間に200人近い応募があり、

92%がインターネットからの申し込みだった。年齢層も 30、40 代が 72%と若い人を取り込むことに成功。（ここまで VTR）



（2）新たな利用者の獲得に向けて

今後コロナがどうなるかわからないところだが、常に新しい方向を考えて市民の方に親しんでいただける公民館づくりをしていくことは基本的には変わらないと思う。

「公民館に地域の“いま”を実装する」をコンセプトに、今地域が抱える社会的課題や知的好奇心を反映させた専門人材を起用した10のオムニバス講座「北公民館の冬支度」。新しい利用者層を取り込むためにどうしたらいいのかを考えた結果として生まれた。

小学校を窓口とすることで子どもと親世代へ遡求、新たな広報手段とネットでの応募というマッチングで潜在的な利用者層の獲得につながった。また、教える側、参加する側双方にとって気軽なオムニバス形式という1回限りという講座だったが、これをきっかけにレギュラーの講座のプログラムへ講師もステップアップしていくことができた。長崎の“旬”に着目して面白いことをやったり、新しい地域の専門人材を見つけ引っ張り出したりということも公民館の新しい役割だと思う。



10 講座のうち 7 つが新規の講師。既存の 3 講座はデザインを刷新。目新しい講座に既

存の講座が紛れていると新しい方が来てくれる。新たな打ち出し方で新規の受講者が既存の講座にも目を向けてくれるのが大きな発見だった。

また、新規講座を立ち上げ講師をデビューさせるというのは、公民館を担う次の世代の人材を育成することにもつながることも実感した。

講師と参加者が一緒に歳を取っていくというのは公民館の長所でもあり課題でもあるが、次の世代は誰が担うのか。講師を見つけていくは公民館がやっていくこと。

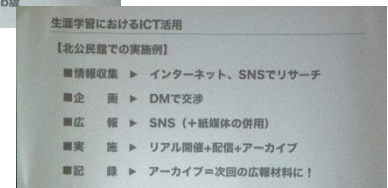
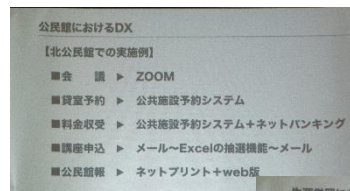
コロナ禍で定員が制限されたことによって、1対5という少人数制の新たな講座のスタイルが比較的受け入れられやすくなり、新しい講座の講師もデビューさせることができた。これは、コロナの功罪の功。

また、トークショー形式での遅い時間帯の開催をすることもできて良かった。

（3）コロナをなかったことにしない

コロナでいつかやるべきだったことを前倒しで達成せざるを得なくなったということが多分にあると思う。他方で、本当に

やるべきことだったのかという精査はなされていたのかについては疑問に思うところ。ICT 活用については、これからグループ討議でも参加者のみなさんに話し合ってもらいたい。



配信以外にももっとできることがあるの

ではないか。また、講座配信に限っても、再生回数以外にも評価基準を定めて、ブームが去って再生回数が下がっていった時に公民館の存在をどうアピールしていくのか考えておく必要がある。さらに言うと、今の人員で ICT の活用をし続けることができるのか。とすると、ICT の活用より先ずすべきことは、DX で業務を効率化して本来の公民館業務に注力して市民サービスを向上させること。ICT の活用より大きいことを考えておく必要があると思う。

みなさんは、いかがでしょうか。

5. ディスカッション発表

A グループ

○地域にある学校と地域住民と一緒にできること。小中高大など子どもの力や地域の住民も一緒になって取り込んでやれることがたくさんある。

○学校にとっても公民館との連携が大事と再確認できた。

○職員が学校への働きかけをすること。市によっては学校関係の集まりに職員が出向いて発表することとか、東大和市では校長会から公運審に入っている。東大和の自慢。

○多様な意見があっても、「とりあえずやってみよう」「とりあえず動くこと」が大事。

○課題解決は率先して取り組むべき。地域のニーズ、講座のテーマは今の時代に合わせたものを取り入れる必要がある。

○ICT、デジタル化が進んできたが、やはり対面が必要と実感している。

B グループ

○長崎市北公民館のお話では、20～40代の女性からの HP アクセスが多いことから探っていたこと、その視点でのアプローチが

できていないから参考になった。

○方法論を含めて勉強になった。学校との連携もそうだと感じた。

○指定管理をどのようにしたらいいのか聞いてみたい。

○公民館の発展に向けて、若い世代から教わるという発想も大切。高齢者とかかわることも重要。

○地域に広がる繋がる公民館、公民館から学校、公民館から自治会というアプローチはあるけど逆はない。どうしたらいいか。

○公民館からの発信が大事。

○自治会や学校に「公民館」に対してのイメージがないし、掘めていないことが課題。イメージ作りが大事。公民館・学校ともに敷居を低くしていくこと。公運審が間に入ることも大事。



C グループ

○利用者として高齢者が多いからオンラインが使える人も多くいるのでは。YouTube は公民館がやりたくても自治体として OK ができるのかも課題。

○課題別のテーマに対し、参加した市民の、その後の活躍の場がないんじゃないか。

○子どもたちや外部の力をどう取り入れていくのかが課題。

D グループ

○コロナで使えない時期があって気づいた。人と繋がる場所は公民館。多くの人の役に立つ、繋ぐ場所であってほしい、

○ニーズ把握が大事。企画実行委員や運営委員会、いろんな関係者をとおしてニーズをつかむこと、やれない理由・できない理由・公民館に來れない理由も大事

○つながる方法、選択肢を増やすことが大切。告知・PR の工夫、設備・技術の進化。カタチにこだわらないことも大事。

○「余白部分」の大切さ。開始前後、休憩中の雑談でつながるから、すべてオンラインとはいかないのではないかな。

○地域のかかわり、職員の技術向上で進化していける。

Eグループ

○ポイントは2つ。①次世代の担い手育成。②広報・申込方法の工夫がQRからネット申込、情報誌「きらり立川」に情報がまとまっていること、紙媒体でも情報集約が大事。

○やりかた一つで広報が変わる。

○講座内容、自治体によってそれぞれ違う。

○趣味的な講座やアカデミックな講座もあっていい。次世代の担い手を集めるのには趣味的な講座も大事だが、アカデミックな学習講座も公民館として大切。

○学校に企画や協力を働き掛けるタイミングは年度替わり前1～2月がいい。

○地域とのコラボ、公民館だけでやれることには限界がある。他施設・学校いろんなところと連携すること。

○個人の学習ニーズにもこたえる必要がある。個人のニーズの受け皿になること。

○「なぜ公民館でやる必要があるのか」という問いを常にもつこと。

Fグループ

○コロナ前からの繋がりがあったことが大事。

○コロナ中に実施した利用者アンケートで、

普段からのサークル事情を知れたこと、オンラインへのチャレンジもできた。

○謝礼、申込、オンライン化の課題があげられた。今後の公民館のあり方、その場の空気感、雑談も大事。

○オンラインとの付き合い方、取り入れ方と公民館のこれからが大事。

Gグループ

○アナログで動いてきた公民館がコロナでICT化に「追い詰められる」ことになった。

○デジタルをひとつのツールとして利活用することで、これまで以上に取り入れられるんじゃないか、ハイブリッドも。若い力を取り入れていかねばならない。

○若い人を巻き込んでいくとき、スマホ教室を子どもや学生に関わってもらうなど、新たな力として公民館に加えていけばいい。

以上のグループ発表を受けて、助言者の東京学芸大学教育学部准教授 倉持氏よりコメントを頂く。



さすが皆さんそれぞれすばらしい発表だった。それぞれが個性もありながらも、まとまった報告をしてもらえた。

連携や協働の重要性では学校、地域、市民、施設間などとの発表も多く、改めて実感していることがわかった。

課題解決に対して自前主義ではなく、外部と共に、お互い話し合っ解決していくというのが、みなさんの中にある。

デジタルICTについてはどのように使っ

ていくかを現実に使っているからこそ具体的に話されていた。

デジタルICTの活用で新しい利用者層の拡充に使えるという意見と同時に公民館が持っている「余白」とか「空気感」とか「場」というものの意義を実感している報告が多かった。どちらがというものではない。

公民館活動を活性化させていくために、地域のひとりひとりのニーズを運営に生かしていくことは公民館の原則。企画実行委員、公運審、市民などが間に入ることでさらに地域に広がり、新たな利用者に繋がるとの発表もあった。

広報の問題意識も多くあった。どう工夫し、広げていくということ。学んだあとの活躍や活動の場については、学び、繋がり、活動するといったプロセス、学びの循環の重要性についての発表もあった。

そうしたことを含んで公民館を知ってもらい、公民館イメージをどう作っていくか、なぜ公民館なのかを意識しながら、まだ公民館の知らない人使ったことのない人にアプローチしていくことが重要であるとの発表もあった。

3名の事例報告者のお話の受け止めとして各グループの報告を聞いた。

矢島英明氏(国分寺市立第九小学校長)

会場の熱気に圧倒された。公民館をどう進化させていくか熱い思いがみえた。2人の発表が印象に残っている、公民館がどういう思いでやっているかが伝わってきた。学校も考えながら公民館と連携しつながりを深めていきたいと感じた。グループディスカッションで「学校は壁が厚い」、「校長によって考えが違うから」というご意見も聞いた。心に受け止め敷居は低くを心掛けたいと感じた。たしかに校長が変わると方針も変わることも

あるがそこで大切なのがコミュニティスクール。校長が変わっても変わらないのがコミュニティスクール。そこには地域と学校に軸足を置くキーマンがいる。その繋がりを活かしながら公民館とつながっていければと思っている。

中村和幸氏(小平市仲町公民館長)

8年目でこういった場をいただいたこと感謝。「そうだなあ、うちも」と思う意見がいろいろあった。ICTのこと、今日いまZOOMを取り入れた講座初めてやっている。これからも情報を共有していきたい。

出口亮太氏(長崎市北公民館長)

いろいろな方が参加していること意識して報告させていただいた。自治体職員も運審委員も一般市民も。現場で働く職員、専門職ががんばっていてその背中押してくれる上司や一般職の職員や所管課があり、運審委員がいて公民館を応援してくれる市民がいる。その結果としての長崎市北公民館がある。長崎市のHPではフォームの利用が厳しかったりする。しかしメールでもいいとか、公民館で活動する人たちなどが背中を押す「ブーストしてくれる」存在として見守ってほしい。行政の制約と、利用者目線の間でどうやっていくか。

DX(デジタル・トランスフォーメーション)には、WEBの活用だけでなく、施設予約、広報WEB版、などなどいろんなツールがある。情報収集だけでなく、講師交渉、広報、実施もリアルと配信とアーカイブ、記録が次回の広報材料になる。活動の記録を普及させていくことができる。

デジタル技術はいよいよ覚えるものではなくて楽しく活用してほしい。

6. まとめ



倉持伸江氏 助言者（東京学芸大学教育学部准教授）

3人の報告で印象に残ったこと。

矢島校長先生の話では公民館の強み・良さを校長の立場から言ってもらえて励みになった。多様性、持続可能性、学びの循環の拠点など、中にいると気づきにくいことも再認識できた。

連携協働を働きかけるとき、どういうアプローチをすればいいかを話していただいた。

教員であれ、利用者であれ、職員であれ、有識者であれ「見方を変える」ことができているか問われている。敷居が高いとお互い言い合っている状況では変わらない。知らない人に伝える努力をしているか、どう動いていくか。

自分の理解のなかだけで公民館を捉えていたことは、自分の反省でもある。

中村館長の話ではLiNKsのこと、連携協働の組織にどんな人に入ってもらうか、ただ立ち上げればいいのかではなく、どうするか具体的に考えていることすばらしい。

職員の異動によって長年積み重ねてきた繋がりが形骸化するかもしれないという不安。引継ぎの難しさ、その事業、その仕事の「価値」や意義をどう伝えていくかは難しい

ところ。

いろんな組織から人が関わっているが、5年10年と同じ人がやっている、どう新しい視点を入れていくか、重要な問題提起だった。

出口館長の話では刺激ばかりだったが、お話の筋は、「いかにICT取り入れるか」ではない。本来の公民館をつくっていくために、どんなツールを使うか、どのようにニーズをつかむか、広報するか、資源を無駄にせず活かしていくかであった。

それは本質的な課題であり、今後どのように公民館を広く開いていくことにつながるかという報告だった。

この縁を活かしたい。

事例報告を伺うと、「指定管理だから」、「同じ敷地に学校と公民館があるから」など条件的な違いに目が向きがちだが、構造や中身の部分で、自身の活動・仕事と繋がるかを持ち帰ってほしい。

最後に一つ提案したい。

話し合ったりして、感じた違和感、「うちの館は不得意そうだな」とか、そこを大事にもちかえってほしい。「いいね！」だけでなく、「違うかも」と思った部分、もやもや、うずうずを持ち帰ることが大事であり、そこが「進化の種」。

この学びを報告するとき、他の方にも投げかけることで次につながる「進化の種」になるのではと思う。

第 59 回東京都公民館研究大会 第三課題別集会

地域課題をどうやって捉えるのか

事例報告者・助言者 浜松市富塚協働センター 主任 コミュニティ担当 野嶋京登 氏
助 言 者 日本女子大学 人間社会学部 教育学科 教授 田中雅文 氏

企画運営：東京都公民館連絡協議会 職員部会

みんな笑顔のまちづくり 実現への秘策

～地域コミュニティの原点は、楽しい時間を共有すること～

浜松市富塚協働センターの実践報告

事例報告者・助言者：浜松市 富塚協働センター 主任 コミュニティ担当 野嶋 京登 氏

1 みんな笑顔のまちづくりと捉えて

私は、浜松市の富塚協働センターのコミュニティ担当職員で、勤務して5年目です。同センターは、平成 25 年度に富塚公民館から富塚協働センターに名称を変えたので、元々は公民館でした。

以前、東京に住んでいたこともあり、皆さんの地域や風土、文化もなんとなく分かっているつもりなので、それらを踏まえて、本日はお話しさせていただきます。

今回第 59 回東京都公民館研究大会のテーマは、「コロナ禍を乗り越え進化する公民館」です。「進化する公民館」というのは、ちょっとした工夫でブラッシュアップしたものができると考えられます。こうした大きなテーマを与えられると、どうすべきか考えてしまいがちですが、まずは人とのつながりが重要です。そこに繋ぐまでに、はじめの一步を踏み出す勇気や、何かに挑戦する勇気が必要で大切となります。

「みんな笑顔のまちづくり実現への秘策」ということで、常日頃、思っていることは、公民館のような施設の役割は何かという点です。「地域の課題解決」や、「魅力の発信」について、大きなテーマと捉えがちですが、「みんな笑顔のまちづくり」であるというシンプルな考えで良いと思います。地域に住む住民に顔見知りになってもらい、笑顔になってもらう、そして輪が広がって楽しくなり、誰かのために、何かをやってみよう



というような機運を高めることが大切です。そのためには、地域コミュニティの原点として、「楽しい時間を共有すること」が必要です。なぜなら、「楽しくないと人は来ない」からです。まずは、楽しい時間を我々が提供して、輪を広げていくことが重要です。

2 何気ない会話から見える地域課題

まずは地域住民の方や来館者とよく対話をするということです。市民の方たちとの何気ない会話の中から見えてくる課題を捉えていくことです。地域課題といっても大きなものから小さなものまで様々です。それらをどのようにくみ取り、学習課題として地域の人々を巻き込みながら事業へと結びつけていくか、そのプロセスを大切にしたいです。どういうことを地域課題と捉え、それをどのように表現するか、何気ない会話、魅力的な活動、職員自身の個性も重要です。

例えば、「子ども会の会員が減っている」という地域課題が出てきました。

なぜ減っているのかについて、実際の子ども会の役員の方や子どもたちと意見交換をしたところ、

- ・親が役員をやりたくない（特に5、6年生になると）。
- ・習い事が増えてきた。
- ・共働きが増えてきた。

といった原因がわかってきました。

そこで、この解決策として、コミュニティ・アシスタント（コミュニティ担当職員をアシストする若者ボランティア）という制度を構築しました。

コミュニティ・アシスタント制度の創設
⇒やる気のある若者たちが来てくれるようになり⇒若者が子ども会の運営に携われる
⇒子どもたちが喜ぶ⇒お母さんたちに運営を任せられる

といった形で、若者、子ども、親の3者をマッチングさせる機能ができました。3者のモチベーションが上がった瞬間でした。

3 どう企画するか？相互交流がミソ

地域の課題や声、要望を形にする時に、どういう表現や見せ方をするのが効果的か、講座を企画する際にどういう効果が見込めるかを、念入りに検討することが大切です。

4つのステップを踏んでいき、またステップ1に立ち返り、段階を踏んでいきます。

<STEP1>

エリア特性を知る 《何事も最初が肝心！》

・利用者をはじめとする地域、人、商店、地形などの特性をインプットする。

・公民館に来てもらえるような仕掛けを考える。

公民館という建物にこだわるのではなく、地域という大きい目で、つながりができるのかを検討することが大切です。

<STEP2>

声・要望・提案などを受ける

・多くの方と「何気ない会話」をする。

・いつ・どこ・だれ・どのようなニーズ？

課題の把握を行う（分析）。

ニーズを把握する際に注意点があります。利用者や住民の方に「この地域の課題って何だと思います？」っていきなり聞いてもなかなかストレートな答えを聞き出すことは難しいです。上手く引き出すコツは、何気ない会話です。難しくない何気ない会話をして、仲良くなることが大切です。

<STEP3>

声・要望・提案等をカタチにして実現する

・一緒にやりたいことをカタチにしていく。

忙しい人が多い⇒伴走型の支援！

・課題解決のために必要なことを考える。

決して一人で考えない！！

・実現に向け、提案者のやりがいや達成感を提供していく。

・できることから着実に実行！

最初から100%は求めない。

各市町村には総合計画があります。浜松市の場合は「市民協働で築く未来へかがやく創造都市・浜松」です。

忙しくて、担当している地域の行事等をすべてやりきることが難しい住民たちがいた場合、私たち職員と一緒に考えてくれる方たちと両輪で回していくのが理想的です。

また、いただいた声をパンフレットやイベントにすることによって、やりがいや達成感を提供し、モチベーションを上げることも大切です。

「たとえ失敗（人が来なかった等）でもいい、何でも一緒に挑戦しよう」という意識を持って機運を高めていくことが重要です。

<STEP4> 相互交流

・顔見知りが増えていき、協力者を拡大していく。⇒マッチング！つながり！

・誰かのために、もちろん自分も、楽しむ！

・普段から、より良い地域をつくろうという機運を醸成していく！

・職員はすべての人のニーズ等のハブ機能

を果たしていく⇒魅力の発信！

STEP1からSTEP3までで終わりがちだと思うが、STEP4の「相互交流」を私は最も重要視しています。地域のために何かやろうという方同士の顔見知りが増え、さらに協力者が拡大していきます。

そういった方々を結び合わせる機能を発揮していくことが重要です。「ハブのような役割で、すべての人のニーズを結び付ける」というところまで、私は考えています。

4 地域に飛び出して屋外企画を実施

コミュニティ担当職員の主な役割は、「地域住民と一緒にやって行う地域の課題解決」や、「魅力の発信」です。

全国の先進事例を学ぶため、令和元年7月に浜松市の職員研修プログラム「虎の穴事業」に参加し、沖縄県那覇市若狭公民館の「パーラー公民館」（移動型公民館）を学びに沖縄へ向かいました。若狭公民館長へ何をするんですか？と尋ねたら「何もしない」との返事に驚きました。「人が集まると何かが起こる」と言うのです。実際にそれを体感しました。

公民館の原則「つどう」「まなぶ」「むすぶ」の機能は、公民館の中だけではなく、公民館の外でも実施できることを学びました。

地域の方々にこの体験を話したところ、

- ・「子どもたちが外で遊ばない」
- ・「日常的な幅広い世代間交流が少ない」
- ・「楽しそうだからまずはやってみようよ」といった声をいただきました。

4カ月後の令和元年11月に、浜松市でも実際に屋外で「あおぞら協働センター」と名付けて開催してみました。

イベントが単発で終わってしまわないように、「出会い」を特に大切に意識して取り組みました。

「あおぞら協働センター」の旗を見た男

性から、「このイベントは何をやっているのですか」と聞かれたことがあります。「何もしていません。集まった人たちで何かが起こるのが面白いんです」と答えたところ、そのコンセプトに共感したその男性が、たまたまマジシャンで、そのまま参加者に向けて、即興でマジックを披露してくださり非常に盛り上がりました。この瞬間、人との「出会い」とつながりがとても大切であり、そして公民館活動はこうであるべきと感じるようになりました。

令和2年度以降の「あおぞら協働センター」は、流石に「なにもしない」だけが続くと、人が来てくれない不安もあったので、ちょっとした工作を取り入れるなどの工夫を施し、令和4年度となった現在でも多くの方々に参加いただいています。

最近では、偶然近くで「よさこい」の練習をしていた大学生サークルに声をかけたら、急遽よさこいを披露してくれました。その大学生と話してみると、いつもボランティアなどで活動する大学生の友人だったことがわかり、「世間は狭い」と感じると同時に、改めて「出会い」の大切を感じました。

5 屋外企画つながりから誕生したワークショップ ヤー！ヤー！ヤー！

その後も継続している屋外企画「あおぞら協働センター」では、アーティストをよく招いていました。様々なアートを事業に取り込むことで様々な表現方法を認め合い、ダイバーシティの実現に寄与すると考えたからです。約3年が経過した頃には、6人のアーティスト同士も仲良くなり「ワークショップ ヤー！ヤー！ヤー！」という団体を立ち上げ、体育館でワークショップが開催されることになりました。会場を体育館とした理由は、浜松市では、体育館が公民館に併設されている場合が多いためです。シ

ルクスクリーンや、布の小物、木工など、様々なワークショップが開かれ、2日間で約 600 人の参加者に来ていただくことができました。この経験からも、改めて、公民館事業は、建物にこだわる必要はないと感じ、また、同じ時間を共有することで地域住民同士のつながりが生まれると感じました。

6 市民の声から佐鳴湖ごみゼロ運動

令和2年5月に、衝撃的な「出会い」がありました。住民の憩いの場である「佐鳴湖」や「段子川」のごみ拾いボランティアをしている佐鳴湖・段子川ゴミバスターズの福島正義さんが突然来館し、「佐鳴湖のごみが減らない」と嘆き訴えてきたのです。実際に一緒に現地へ行ってみると、その川の汚さに衝撃を覚え、これは地域課題であると強く感じました。すぐに、佐鳴湖を取り巻く近隣の複数の協働センターに連絡し、福島さんへの支援や打開策を一緒に考えました。

私がすぐに取り組まなければならないと思った理由は、大きく2つあります。

1つ目は、公民館だけではなく、周囲の街並みや景観について目を向けることも大切だと考えているためです。確かに、人間関係の構築や、事業を実施することも大事ですが、清掃に力を入れて、館内や周囲の環境を綺麗に保つことも非常に重要で、これにより魅力ある公民館にすることができます。

2つ目は、ごみ拾いのボランティアである福島さんの熱量に純粋に圧倒され、心を動かされたからです。福島さんには、無償報酬で佐鳴湖のごみを毎日拾っていただいています。行政として、また公民館として、これは支えなければならないと強く感じました。福島さんのように、公民館には来ないが、地域で素晴らしい活動をして輝いている人は必ずいます。そういった方を見つけて、公民館のより良い活動につなげるこ

がとても大切です。

佐鳴湖のごみ削減に向けた具体的な取組は、市の環境部との連携や、センター内への掲示などです。しかし、ごみは一向に減りませんでした。

そこで、「ごみのお祭りを開けないか」と考え、5月30日に「ごみゼロフェスタ」というイベントを開催することにしました。タイトルは、語呂合わせで、「5月30日＝ごみゼロ」から付けました。事業を実施する上でこうしたタイトルは、市民に印象付ける役割を担うので、とても重要です。ぜひ、何かイベントを企画する際は、そうした部分も意識しながら取り組んでいただきたいと思います。

他にも、各方面で活躍する方々に声をかけ、「佐鳴湖などにごみを捨てさせない方法について考える」をテーマにトークセッションを開催しました。

このトークセッションに参加された、山口氏（浜松若者社中代表）から紹介され⇒ごみ拾いアプリを開発している山内氏（株式会社 Gab 代表）が加わり⇒山内氏の紹介で常田氏（一般社団法人プロギングジャパン代表）と知り合うことができました。

常田氏の助言もあり、「ごみゼロフェスタ」でもプロギング（ごみ拾いとジョギングを合わせたフィットネス）を取り入れ、多くの参加者に楽しんでもらいました。参加者の中には、「プロギング浜松」という団体を立ち上げ、現在もなお複数人で活動している方もいます。加えて、福島氏が実際に拾ったごみを職員で洗ってアートにし、アーティストによるワークショップも行いました。

こういった多くの事例を上げると、「野嶋は企画のアイデアマンだ」と言っていたくこともあるが、決してそういうわけではありません。私が大切にしているのは、課題

解決に対して一人で考えるのではなく、周囲と積極的に対話をし、協力いただきながら取り組むことです。そういった周りの人との連携の積み重ねによって、各イベントを実現させることができたと考えています。

7 第2回ごみゼロフェスタ

1回だけではごみはゼロにならなかったため、「第2回ごみゼロフェスタ」を開催しました。

ウェブデザイナーの方からの申し出により、所有する自動車（黄色いビートル）の左側は現在の佐鳴湖を、右側には将来、理想とするきれいな佐鳴湖を、子どもたちに思い思いに描いてもらいました。

植物栽培の専門家を招いて佐鳴湖に生えている野草を使ったワークショップも行いました。浜松市内のごみ問題関係者が集結して3時間のシンポジウムも開催しました。

「ごみゼロフェスタ」については、佐鳴湖以外の地域のごみに対しても、様々なアプローチを行っています。

8 佐鳴湖ごみゼロ推進キャラバン隊

一昨年からいろいろ活動したが佐鳴湖のごみがゼロにはならなかったため、富塚協働センターの事業について審議する富塚協働センター運営委員会において、「佐鳴湖は周囲6kmの広い湖なので、もっと広域に周辺の協働センターと一緒に活動したらどうか」とのご意見をいただきました。

そこで、佐鳴湖周辺の協働センターと連携して「佐鳴湖ごみゼロ推進キャラバン隊」を立ち上げ、ごみ問題に取り組むことになりました。キャラバン隊の活動として、中学生と一緒に、ごみを出さない暮らしについて学びました。

また、パーマカルチャー（人と自然が共生して持続可能かつ豊かな暮らし方を目指すこと）を学習することで、過去の暮らしと現

代の暮らしを比較し、これからどう生活すればよいのかを考える機会を設けました。

上記のことを体験する場として、食べられる森の菜園を見学しました。菜園には、富塚とは思えない光景で、野菜や果物が沢山あり、トイレを案内された際は、トイレトペーパーを葉っぱで代用しており衝撃を受けました。現代社会では、小中学生が体験したことの無いトイレを使うことで、新たな発想が生まれるかもしれないと感じました。

「食事タイム」では、この菜園で採れた野菜を中心にピザ窯でピザを焼く、ラズベリーのかき氷シロップ、食器も葉っぱを活用し、フードロスについても学びました。

感じたことを発表する意見交換会では、「自然ってすごい」「今の生活を見直さなければいけない」など様々な意見が出ました。この体験により、「自分ごと」として、地域課題の解決を考えることができました。

9 ハロウィン・プロギング

渋谷のハロウィンで、大人がごみを散らかした後、地元の商店街の人たちが片づけている悲しい現状をニュースで見ました。ごみ拾いアプリを開発している山内氏を紹介してもらったことを話しましたが、そのことを私は逆手にとって、仮装して走りながらごみを拾うアイデアを思い付きました。

10 若者ボランティア

「コミュニティ・アシスタント」

浜松市のコミュニティ担当職員として、コミュニティづくりを担うのですが、一人ではやれることは限られています。そこで、ボランティアとして活躍している中学生と縁が切れないように、登録制ボランティア制度を導入し、高校生になってもイベントに携われるような仕組みを考えました。

それに関連して、彼らが自主企画した音楽祭の開催や、タイトル・ロゴなどを発案し

た「富ックオアトリート！2022」を開催しました。イベントには、自治会や地区社会福祉協議会も加わり、お菓子撒きやスタンプラリーなども行われ、大変好評でした。関係者を巻き込んで、「波及効果を生むこと」が大切であると改めて感じました。

11 持続可能な地域社会の創造 富用品市「ピタゴラス」

地域で優れた活動をしている方が集まって、毎週土曜日に、入場料を100円払えば、建物内にある不用品（富用品）を持ち帰っても良いシステムを扱っているピタゴラス富塚という団体がある。富塚町内にあったが、SDGs的な観点で更に広めたいと思い、協働センターのロビーで1か月出張コーナーを設けた。その結果、1,132品持ち帰ってもらうことができ、新しい循環システムを作り出すことができた。この素晴らしい取り組みを市長、環境大臣に推薦したところ、表彰され、地域の人たちの活動が認められた瞬間でもありました。

12 ミドル世代との連携 「佐鳴湖公園の利活用」

地域のミドル世代の方を募り、佐鳴湖を地域のごみの問題だけでなく、今後どう利活用していったらよいか、定期的に打合せを行いました。

地域のミドル世代と一緒に、佐鳴湖の魅力を発信する「佐鳴湖パークデー」を開催し、魚の観察・外来種カメの捕獲・コナラ山観察・BBQ・マルシェなどを行いました。佐鳴湖のごみ問題解決後の、公園の利活用をしていく良いきっかけとなりました。

そのほかの活動として、ロゲイニングとプロギングを併せた佐鳴湖プロゲイニングや、ごみ拾いはスポーツであるという企画で「スポGOMI」を実施しました。

また、佐鳴湖公園で災害時に必要とされ

る水3リットルを利用したサバイバル防災合宿を行い、翌日の発表会では、各自が災害に対しての情報を共有しました。

13 ブラジル人学校が移転してきたのをきっかけに！国際交流！

令和2年4月、富塚地区にブラジル人学校が移転してきた際、地域住民とのトラブルもありましたが、仲裁に入ることによってコミュニケーションを取り、夏には、ブラジル人学校も夏祭りにブースを出店しての入れゲームで盛り上げてくれました。

14 ワクワク感やドキドキ感を与えられていますか？

今回の事例報告を通じて、みなさんに改めて考えていただきたいのは、

■声・要望を形にして実現していますか？

■ワクワク感ドキドキ感を与えていますか？

という問いかけです。

何より大切なのは「人とのつながり」です。

そのためには、まず人とのつながりを大切に、多くの対話をしていただきたいです。また、緻密に計画した上で、思い立ったら即行動に移していただきたいです。

15 蚊取り線香の真ん中から外へ

先日、第34回全国公民館セミナーで、超ミライ型の公民館を提案してほしいと講師依頼され蚊取り線香に例えて話をしました。

蚊取り線香は普通、外から火を付けますが、真ん中から火を付けるとどうなるかを話しました。つまりまず初めに、人や公民館から火を付け、そこからどんどん輪が外側へ広がっていき煙が出て周りを巻き込んでいくイメージで行動すると伝えました。

その時に心掛けることとして、公民館という建物内だけで考えるのではなく、大きな地域として捉えることが大切です。地域には、床屋さん、漁師さん、農家さんなど、

様々なサービスを提供している人たちが必ずいます。そうした方々に職員が、蚊取り線香を地域の何カ所かに備え付け、火を付け周りを巻き込んでいくように関わりを持てば、幅広い交流が自然と生まれてきます。

改めて述べますが、「地域課題をどうやって捉えるのか」については、「地域の住民との対話」から始まり、「将来について一緒に考えること」が、未来の公民館であると私は考えます。

浜松市富塚協働センター主任コミュニティ担当の野嶋京登さんの

様々な先進的取組の事例報告から見えてくるもの

助言者：日本女子大学人間社会学部教育学科教授 田中 雅文 氏

1 キャッチコピーで心をつかむ

野嶋さんの様々な先進的な取組につけられた各キャッチコピーは、どれも語呂のいい、聞いていて心地よいもので、何かが起こりそうな大事なコンセプトも入っていて、ストーリー性を持ったイベントだということが伝わってきます。

例 富ック オア トリート！2022

富用品市「ピタゴラス」

ハロウィン・プロギング

佐鳴湖ごみゼロ推進キャラバン隊

これらの人の心をつかむ、伝わりやすいキャッチコピーを中心におくことで、いろいろな人が集まってきて、さらにメンバーが知り合いの専門家まで連れてきたりして、アイデアを出し合い、ワクワクしながら協力し合って、周りを巻き込みながら、次々と実現されていっています。

ごみから、いろいろなコンセプトでなんでもできることを実証されていて様々なイベントノウハウも蓄積されていていっています。

2 7つのにじ色のメッセージ

- ①笑顔 笑顔で出会うだけで楽しい
- ②対話 なにげない対話が大切
- ③知る 地域を知る
- ④出る そのために外へ出なければ
- ⑤出会う きら星な人を見つけよう

⑥つなぐ きら星同士、施設同士等

⑦何もしない そこから何か始まる

3 ワクワク感やドキドキ感を与えていますか

主催者も参加者も見ている人もワクワク



ドキドキする事業を考えてください。蚊取り線香を中心から火をつけると外側へと広がっていくように、人とのつながりを大切にしながら公民館の外に出て、周りを巻き込みさらに広がっていくワクワクする事業をグループワークで考えてみてください。

各班のグループワーク発表を受けて

今日一日で、皆さん頭が柔らかくなって発想が豊かになったと思います。野嶋さんの話がインプットされ、市民のニーズから自由に各班で話し合って発表いただき、見えてきたポイントが7つありました。

- ①既存の施設を使う。
- ②「何もしない」ではなく、少し用意しておいて、何が起こるかを見る。

③社会課題を逆手に取る。築 50 年の古い施設でお化け屋敷を開催するなど。

④つどう。多様な人が集まる。

⑤まず自分がワクワクする。

⑥大それたことでなくても、小さなところから。

⑦外へ広がる蚊取り線香の中心は子ども。公民館は大人の学び舎というだけでなく、子どもを核とした地域づくりへ。

今後の公民館の展望

「生涯学習」と「地域づくり」の相乗効果を高めるために。

第1段階：戦後の公民館は、地域づくりの総合的な学習拠点だった。

第2段階：その後、公民館等の社会教育行政の役割限定化、競合相手（企業、大学等）の多様化⇒地域づくり拠点としての地位の低下

第2.5段階：公民館の魅力を高める。

第3段階：今後は、多様な施設・機関のネットワーク化により、生涯学習と地域づくりの相乗効果を生み出す総合的な仕組みが必要。

⇒「地域まるごと社会教育」構想

【4つの条件】

①各施設等に力量のあるスタッフの配置

②市民も一緒に考える需給融合型の学習機会

③地域全体の協働体制

④自治基本条例で公民館の「学び」を担保

【前提としての学び合い】

①コロナ禍を経て、

対面、オンライン、対面とオンライン併用

②地域丸ごと社会教育（第3段階）へ行くためにも、まずは公民館の魅力を高め、地域とつながる土壌づくりを行っていく。

※田中雅文「終章 学習と地域づくりからみた社会教育の可能性」田中雅文監修、柴田彩千子・宮地孝宜・山澤和子編著『生涯学習

と地域づくりのハーモニー社会教育の可能性』学文社より

グループ発表

野嶋氏の事例発表後、助言者の田中雅文氏より、「ワクワク感やドキドキ感を実現するような事業を考えてみよう」との提案があり、グループで話し合い、発表しました。

【第1グループ】

多摩六都科学館や、ある自治体のすべての公民館を一日無料に開放します。講座を開設したり、企画せず、何もせず、施設を利用してもらい、公民館であれば、暑い時も寒い時も快適に過ごせる等を地域の子もたちに知ってもらい、集いの場所として利用してもらえれば、親や祖父母いろんな方が公民館に来ていただけるのではないかと、またいろんな世代の方が集えば何かが起こるかもしれないというワクワク感やドキドキ感を持てると思います。

【第2グループ】

空き家を利用して事業をしようと考えました。まずは住民の方と一緒に地域を回り、空き家の現状を把握します。そして民間業者にその空き家を活用してもらいます。空き家の利用方法は1つに限らず、なんでもできるようにあえて決めません。そこにはカフェもあり、楽器も置いてあり、子どもが勉強するスペースもあり、だれでも気軽に利用できるようにします。社会課題をみんなで見つけていき、アレンジしていければ、その社会課題も解決し、ワクワク感やドキドキ感につながっていくのではないかと思います。

【第3グループ】

ある自治体の公民館は築 50 年で、そこでお化け屋敷をしてみたら、楽しそうということで考えてみました。そこは児童館併設のため、コラボレーションもできるので、

企画運営は子どもたち、特に中高生にやってもらい、大人たちは見守り、そのサポート



をしていきます。その中で公民館としてできることは場を提供する事、機会を与える事、いろんな方に声かけをすることです。人と人とのつながりができていき、大人は子どものすごさを知り、子どもは自分に自信を持ち、自己肯定感を持てていけるようになるのではないかと思います。

【第4グループ】

コロナ禍で人々の分断が進んだように思います。まずはいろんな方を集めることが必要だと思い、さまざまな方たちを集めるコンテストを開催し、多様性を競い、チーム作りをしてもらいます。その1週間後、そのチームで考えたメニューを作ってもらいます。出身地も違うみんな、食すという企画なら、みんなで笑顔になれるのではないかと思います。

【第5グループ】

簡単なことからいろいろな事業を考えてみました。

- ・子どもからデジタルデバイスの操作方法等を学ぶ
- ・日本が誇れるサブカルチャーというアニメの声優の方から手ほどきを受ける。
- ・子どもが好きそうな落書きコーナーを設けたり、また壁の落書きをペンキで綺麗にする。
- ・公園へ出かけて行って、野草を取って、食べられるかを調べる。

- ・ゴミ捨て場で使えるものがないか探してみる。

【第6グループ】

大学生との連携や外国にルーツのある人との交流はしていたりするが、Z世代の若い人が公民館に来てもらうことって難しい。理由として、世の中の流れが厳しく、生活にも余裕がないと思います。まず、自分たちがワクワクすることを考えることが大事だと思いました。そしてそれが、大きく広がっていけば他の方たちにもどうするべきなのかわかってくるような気がします。

【第7グループ】

今日の研究会を聞き、自分たちがこれまで、初めから目的やテーマを決めて事業企画していったことに問題はなかったろうかと振り返りました。若者を巻き込もうとか企画を展開するのではなく、職員が公民館に来る利用団体などに積極的に話しかけ、いろいろな意見を聞いたり、情報収集をする中で、得意分野がある方を見つけたりして、今まで、職員が一人で考えていたことをやめて、得意分野の市民たちからもアイデアをもらい企画してみて、失敗も恐れずとりあえずやってみようと思いました。

【第8グループ】

自分たちがワクワクすることはなんだろうと考えた時、音楽フェスが楽しそうだと考えました。偶然通りかかったら音楽が鳴っていて、そこで新しいことに出会えたら楽しいだろうと思います。川原での実施であれば、ステージで音楽をする人がいて、石や枝などを使ってのアート作成、食事もできて、ゲームもできたら子ども達も集まるだろうと思いました。川原の中に個人や団体が絵などを展示できるスペースを設けるのも楽しいと思いました。

また、椅子と机を用意し、何もせずにはぼー

っと過ごす人がいてもいいし、ファシリテーターがいて、いろんな方とのつなぎ役をやっても楽しそうだと思います。

【第9グループ】

楽しい内容に限らず、同じ思いの人がいればそれはもうワクワク感があると思います。条件があり、民間企業であれば、その企画に1人しか来なければ次回継続はないが、公民館で考えることであれば、少人数の参加でもその結果を踏まえて次にどうすればいいのかを考えていけるという、企業とは目的が違うということで、安心感があり、ワクワク・ドキドキというものに取り組んでいけるのではないかと思います。参加する人、企画する人みんながワクワク・ドキドキしなければいけないと思うので、参加というよりは参画ということになると思います。仲間が出来、出会いがあります。子どもも企画から参加してもらったら、みんなでワクワク・ドキドキ感を味わうことができると思います。

質疑応答

【質問】各グループ発表内容の講評を野嶋さんにしていただけますか。

【回答（野嶋氏）】全体的に、子どもと高齢者、若者と高齢者など「相互交流」の話がよく出ましたね。これはとても重要なことです。

先日、僕が若者ボランティア「コミュニテ

ィ・アシスタント」と会議をした際、公民館というのは色々な世代が集まって地域をより良くしていこうという考えがあることを説明した上で、「あなたたちは何がやりたいの？」と正直聞きました。

そんな中、Z世代が高齢者にスマホの使い方を教える講座が、案として出ました。

こちらについては、高齢者に対して上から目線に感じるので、

■若者と高齢者が1時間ずつお互い技術を教え合う「技術交換会」

というのはどうかと提案したところ、若者が高齢者にスマホを教えて、高齢者が若者に編み物や書道などを教えることで交流が生まれる等、色々なアイデアが出まして、その企画を実行してみようとなりました。

■今日のアイデアをぜひ実現してほしい

全体の講評として特に言いたいのはグループ発表内容を是非実現していただきたい、ということです。みなさんは今日の研修でとてもやる気に満ちて職場に戻り、職場でそのアイデアについて話をするらず、同じ職場の職員で否定する人がいると思います。でもそこを上手く説明しながら一緒にやっていくことが一方では一番大切なことです。公民館運営は利用者や地域と一緒にやっていくことの重要性を話しましたが、毎日顔を合わす職員との合意形成、コンセンサスを経て、すり合わせしながら、ぜひ実現して欲しいと思いました。



第59回東京都公民館研究大会 第四課題別集会

次世代に公民館をつなぐ ～学生・子育て世代が考える これからの公民館～

事例報告者1	東京学芸大学 教育学部	山下瑠里子	さん
事例報告者2	第4期国分寺市公民館運営審議会委員 元国分寺市小・中学校 PTA 連合会副会長	諏訪玲子	さん
助言者	東京学芸大学 教育学部 准教授	柴田彩千子	さん

企画運営：東京都公民館連絡協議会 委員部会

学生から見た公民館

事例報告者1：東京学芸大学 教育学部 山下瑠里子 さん

1 はじめに

「学生から見た公民館」。今回、この題名でお話をする機会を頂いたのですが、当初どのようなお話をさせていただこうかと、とても迷いました。「学生」といっても様々な価値観を持った人たちがいます。特に社会教育に限っていえば、「社会教育を経験している又は学習している学生」と、「社会教育にあまり触れていない学生」の2つに分類することができるでしょう。現在の私は前者の学生に該当していますが、現在所属している学部に入學して社会教育について学ばなければ、そして公民館で社会教育実習を行わせていただかなければ、後者の学生に該当していたはずです。加えて、多くの学生は現在後者に該当することが予想できます。そこで、まずは前者の学生に該当する私自身の公民館活動経験をふり返り、その次に後者の学生に当たる私の友人5人に行ったヒアリング調査を基に、学生が公民館に抱くイメージをまとめてみようと思いました。それらを踏まえて、今後の社会教育施設に期待することを、私なりにご提案させていただきたいと思います。

2 公民館活動の地域差について

私は東京出身ではなく、地方の出身です。現在は東京で生活していますが、地方出身者だからこそ感じた公民館活動の地域差を軸に、社会教育実習での経験も踏まえて自分の考えをまとめたいと思います。

私の地元は多摩地域ほど公民館活動が盛んな地域ではありません。公民館に行ったことすらあまりなく、年に1～2回行くか行かない程度でした。先程触れた、

社会教育にあまり触れていない私の友人5人も同郷であるため、地元での公民館活動経験について聞いてみたのですが、同じような回答でした。長期休みに行われていた子ども向けのイベントに参加したことのある友人もいましたが、ほとんどが単発利用中心で、継続して公民館に足が向いていた友人はいなかったのです。このように、私は公民館に関する経験がほとんどなかったため、社会教育や公民館の役割などについて理解することも明確なイメージを持つこともできないままでした。しかし、東京に来て社会教育実習を通して公民館に関わる中で、様々な驚きや発見があり、公民館という空間が持つ面白さや楽しさに気が付くことが出来ました。例えば、保育付きの講座や障害がある方向けの講座・活動は、東京に来て初めて触れたものです。多摩地域では当たり前のように行われていることかもしれませんが、地域によっては当たり前ではあ



りません。そのような違いが出てしまうのは、職員の数や力量に差があるからではないかと考えています。地方の公民館職員も限られた資源の中で一生懸命活動しているはずですが、その中ではどうしても限界が出てしまいます。そのように、公民館活動には地域差があるという事を、せっかくの機会なので地方出身者としてお伝えしたいと思い、この話題に触れさせていただきました。

3 「学生」間での公民館に対する認識差

ここからは、「社会教育にあまり触れていない学生」が公民館に対してどのようなイメージを持っているかについて、ヒアリング調査を基にまとめたいと思います。

5人には、大別すると2つの質問を投げかけました。1つ目は公民館関連の情報に触れる機会があるかないか、2つ目は公民館に対してどのようなイメージを持っているかです。大学の社会教育実習と、個人的に関わらせていただいた公民館講座では、中高生や働く世代などが公民館から足が遠のいている、広報をしてもなかなか来てくれないという経験を何度もしていたため、広報に関わるような事柄も聞きつつ、広く公民館に関することを聞いてみました。

1つ目の質問について、5人全員が公民館関連の情報を目にすることはほとんどないと回答しました。また、そのうちの1人は、「入ってこない・目にしない情報を自分から集めに行くほど社会教育などについて積極的な姿勢ではない」と教えてくれました。公民館関連の情報は市報で載っていることが多いですが、1人暮らし先で市報を見ている人は5人中1人しかいませんでした。

2つ目の質問について、良いイメージとしては5人中4人が「地域に必要な場所」と回答しました。地域の人が集まることのできる場所だと認識している、と答えた友人もいます。その一方で、5人全員が「自分が公民館に行くイメージは持てない」と回答しました。その理由を詳しく聞くと以下の3つの理由が出てきました。

- 単純に行く時間がない
- 公民館へ行くハードルが高い
- 用事なく行く場所ではない

「公民館は地域に根差した施設で人と関われる場所だとは思っているが、そこでやっている集まりには気軽に参加しにくい」という意見がありました。また、今公民館に行く必要性を感じず、自分が子育てをするようになったら関りはありそうだという意見もありました。

4 社会教育施設に期待すること

ここからは、3で言及した社会教育にあまり触れていない学生が抱く公民館に対するイメージのうち2つに着目して、それに対して社会教育施設がどのような取り組みを行うことができるのかについて、提案をさせていただきます。

まず「公民館へ行くハードルが高い」という点に着目します。こう感じてしまう理由を私なりに考えた時、公民館でどんなことをしているのかが分からないからではないかと思いました。例えば、図書館や博物館であれば本や文化財といった物を想像することができます。一方、公民館と言えば、といっても明確にイメージできる物は思い浮かびません。だからこそ、どんなことをしているのかわからないのではないのでしょうか。そこで、子どものうちから公民館に対する

良いイメージを持ってもらうことが大切なのではないかと考えました。前述のように、私は小さい時に公民館活動に活発に参加していませんでした。その結果、公民館が自分の活動場所の選択肢に出てくることすらありませんでした。もし私が小さいことから公民館に親しんでいたとしたら、結果は変わっていたのかもしれませんが。このような自分の経験からも、小さい頃の原体験は重要なのではないかと考えています。具体例として、例えば公民館運営に子どもたちが関わり、子ども自身が講座を企画してみたり、学区内探検などの学校行事と公民館が連携したりすることが想定できます。「百聞は一見に如かず」という言葉があるように、公民館についての話を聞くよりも実際に活動している方と対話をする方が子どもたちの記憶に残りやすいはずです。また、先程公民館に関連して想像できる物が無い、という事を述べましたが、だからと言って公民館に何も無いわけではありません。公民館最大の特徴は、人の繋がりがあることだと思います。それらと学校の部活動とを結びつけて支援することも可能なのではないかと考えています。現在、少子高齢化や教員の負担増大に伴い、部活動を外部指導者に委託したり、総合型地域スポーツクラブや複数校での合同部活動の取り組みが導入されたりしています。そのような活動に公民館が介入し、外部指導者を紹介したり、公民館で部活動を行える仕組みを作ったりすることが出来ると思います。

2つ目に着目するのは、「用事なく行く場所ではない」という点です。これを解消するためには、若者が公民館へ行く目的を作る、かつ、そこに若者へのメリットを作ることが大切だと思います。「楽しそう」「面白そう」そのようなプラスの感情がなければ、足

を運びたいという気持ちは起きないと思います。そのような気持ちを引き出せる活動が公民館にあれば、その活動が若者の間で大きくなって広まっていくことも期待できるでしょう。

最後にまとめとして、一つ付け加えさせていただきます。前述のように公民館最大の特徴は人の繋がりがあること、加えて社会教育の専門性を持つ職員がいることです。場所を提供して満足するのではなく、「人」がいるからこそその強みを発揮し続ける施設であってほしいと思います。

質疑応答

（質問）

学生間でも公民館に対する認識に差があることが発表から分かりましたが、今後その差を埋めていくためにご自身でどのようなことをしていきたいですか。

（回答）

そもそも友人同士の会話の中で公民館や社会教育に関する話題が上がるのが少ないです。これは、同じ学科の友人とでも、社会教育を勉強していない友人とでも、同じです。まずは友人たちに今日の話を含め、社会教育について聞いてみたりいろいろと話してみたりして、自分が社会教育の発信者になりたいと思っています。

そして、会場には多くの公民館職員や市民の方がいらっしゃいました。参加者の方1人1人が少しでもこのような話題を周りに提供してみることで、何か変わる可能性があるはずです。

蟻の一步ではありますが、少しずつでも周囲に社会教育や公民館の魅力を広めていくことが重要ではないでしょうか。

現役世代が公民館に期待すること

事例報告者2：第4期国分寺市公民館運営審議会委員
元国分寺市小・中学校PTA連合会副会長
諏訪玲子 さん

1 自己紹介

国分寺市小・中学校PTA連合会（P連）から、保護者代表として国分寺市公民館運営審議会委員に派遣されています。今日は、子育て世代・現役世代の視点から見た公民館についてお話をします。

現在私は、中学生・小学生・幼稚園の3人を育てながら、まちを面白がって、PTAや任意団体などの様々な活動をしています。「シェアリング・ラーニング」という団体では、不登校や特別支援教育、PTAをテーマにした学び合いの場や子ども向けのワークショップを、公民館やホールやカフェ、オンラインを活用して開催しています。また、「国分寺の投票率を一位に」というプロジェクトでは、投票に行きたくなるために何ができるか、社会実験的な視点で、おまつりや模擬選挙やインタビュー等の取り組みを行っています。その他にも、市の教育計画やパブコメなどをみんなで読んで「やいのやいの」とするといった活動などを、公民館を活用して行っています。ほとんどの活動の参加者は20代～50代の現役世代で、毎回10人～100人くらい集まります。参加費や予約状況や雰囲気等を総合的に見て、公民館やホールやカフェなどを使い分けて活動を行っています。

2 PTA連合会と公民館の連携

私が所属している国分寺市のP連には、学習活動を専門に行う「きょうどう学習委員会」があり、本多公民館と連携して共催で教育講座を開催しています。共催のきっかけとなったのは、第2期国分寺市公民館運営審議会の答申の中で協働講座の開催が提案されたことでした。

2019年度には「自己肯定感を育む」をテーマに3回連続講座が企画され、約70名の方々が参加してくれました。2020年度は「子どもの力を伸ばす」をテーマに3回連続企画が企画されましたが、新型コロナウイルスの感染拡大防止のために延期となり、そのまま2021年度に同じ内容で開催しました。オンラインとリアル開催のハイブリッドを試みるなど、公民館にとっても試行錯誤の機会となりました。2022年度は「ほめない叱らない勇気づけの子育て」と「子育て世代のマネープラン」をテーマに、ハイブリッドで開催しています。



P連と公民館の主な役割分担

共催に当たり、P連側はテーマや講師の選定、広報、当日の運営を主に担当し、公民館側はテーマや講師の選定、講師との交渉・講師費支払い、会場の確保、チラシの作成、申し込み受付等を主に担当しています。もともとあった「準備会」形式を活用して、P連のメンバーが主体的に活動できるように、公民館職員の方がサポートしてくださっています。

<2022年度のチラシ>

国分寺市立小・中学校PTA連合会・本多公民館共催 教育講座

ほめない 叱らない 勇気づけの子育て

～新しい時代を生きる子どもとともに～

1月15日(日) 14～16時	親も自己肯定感が落ちる考え方や 家族の笑顔が増える方法を学びます。 幼児から10代後半の子どもたちが 生き生きと暮らしていくための大人の 関わり方を考えます。	
会場・定員 本多公民館(対面) 60人 Zoom(オンライン) 15人 ※通信費は自己負担です。	講師 のぐち せつこさん (心と体の発達アドバイザー)	小学4年生と2年生になる子 の母。子育てにつまづき、抱 かしていた旦那にアドラー心 理が身に付け子育てで必要 な、勇気づけ、ほめる、叱る 法を楽しく親子関係が良 くなったこととどうやって場所 法を学べる。 著書「イヤラしないママ になる家」子育て がワクワクになるアド ラーの教えー!

申込方法

- 下記必要事項を記入しメール、または電話で本多公民館まで
- ※zoom希望の方は必ずメールでお申込みください
- <必要項目> 件名「教育講座」
本文 ①氏名 ②電話番号 ③住所(町名のみ) ④会場の希望
- 申込期限 12月26日(月)まで
※多数の場合は抽選。定員に満たない場合は、27日以降先着順

【お問い合わせ】本多公民館
電話 042-321-0085 住所 〒185-0011 国分寺市本多 1-7-1
メール honda-kouminkan@city.kokubunli.tokyo.jp

共催「国分寺市立小・中学校PTA連合会・本多公民館」

教育講座 子育て世代の マネープラン

※後2000万円が
必要って本当？
もっと家族で
お金の話をしよう！
資産運用したいけど
何から始めたらいいの？

成人世帯の引き下げ、高度での資産形成授業の必要性など
により、お金の資産形成の関心が高まっています。
この講座で、ライフプラン・マネープランの必要性、資産運用とは何か、
投資信託等について、専業主婦から一緒に学びませんか。

日 程 2月18日(土) 午後2時～4時
講 師 日本証券業協会 金融証券インストラクター
会 場 本多公民館 (5分寺駅北口から徒歩8分)
定 員 100人

日本証券業協会
全国の証券会社を加盟員と
する財団法人であり、金融界
の発展と国民の利便に努めて
います。

申込方法

- 下記必要事項を記入しメール、または電話で本多公民館まで
- ※希望の講座は必ず「受付済」の講座にしてください。
- ※希望の講座は必ず「受付済」の講座にしてください。
- <必要項目>
件名「マネープラン」
本文 ①氏名 ②電話番号 ③住所(町名のみ)
- 申込開始日
1月17日(日)午前9時から先着順

【お問い合わせ】本多公民館
電話 042-321-0085 住所 〒185-0011 国分寺市本多 1-7-1
メール honda-kouminkan@city.kokubunli.tokyo.jp

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、乗客の体温・体調確認・マスク着用の徹底をお願いします。

実施したメンバーの声

共催講座の終了後にメンバーにふりかえりのアンケートをお願いしたところ、下記の声が寄せられました。

「主催者になることで深い学びが得られた」
「こういう学び方があると知った」
「自分の関心から教育講座を開けるとは思っていなかった」
「やりがいやつなかりをより感じた」
「公民館職員がこういうサポートをしてくれる事は知らなかった」
「場所を借りるのが公民館だと思っていた」
「公民館の講座やイベントについて知る機会となった」

共催のメリット・課題

PTA 側にとっては、学びの質が高まり、やりがいやつなかりを実感できるといったメリットが挙げられます。また講師費の負担を減らせるというのも効率化が進むPTA においては重要なことでもあります。また、公民館側にとっては、現役世代との接点づくりにもなり、公民館の未利用者である保護者へのアプローチにもなっています。

一方で、課題もあります。講座の広報は学校でのチラシ配布だけではなく、メンバーの口コミも重要となっており、参加者集めの負担はあります。また、PTAの活動としての主体性をどれだけ保てるのかといったことや、活動の任意性が求められる昨今のPTAの在り方から、そもそも委員会自体が継続していけるのかといった課題もあります。

しかし、この4年連携を重ねてきて、公民館と共催で講座を開くといった仕組みがあることで委員会の負担は減っており、来年度以降も共催の継続を望む声が多く聞かれています。今後も、PTAの在り方を見ながら、継続していける方法を模索できるのではないかと思います。

3 現役世代にとっての学び

現役世代は効率の良さを求める世代でもあります。仕事や子育てに忙しく、生活の中に余白はほとんどありません。そんな中で個別のサービスも充実しており、町内会やPTAなど社会の様々な強制感からも解放されてきており、不便なものややりたくないものは「やらない」という選択肢をとることができるようになっていきます。また、情報が常にあふれており、自分で取捨選択ができます。そのため、自分にとって「メリットのある学び」でないと、なかなか積極的に学んでいこうとはなりません。具体的には、「自分が抱える課題を解決できる」「楽しい、ワクワクする」「つながりを感じる」等がメリットに感じられやすいのではないかと考えます。

実際に、「不登校」や「特別支援教育」や「子どもの自己肯定感」といった、自分が困っている事に関する学びの場には、多くの方が参加してくれています。また、メンバー

がワクワク楽しんで活動していると、その様子に惹かれて多くの人が集まってきます。その結果つながりが生まれると、そこからまた新しい学びが生まれるといった循環も発生していきます。

4 公民館に期待するもの

最後に、こういった私自身の活動やP連と公民館の連携といった活動を通して感じる、公民館の可能性や課題をお伝えします。

まずは、現役世代に届く情報発信をやってほしいということです。いくら興味深い講座をやっている、公式の情報だけでは情報はなかなか届きません。SNSやインフルエンサーを巻き込んだ口コミの活用など、現役世代の情報の集め方に合わせた発信をすることで、公民館の情報に触れる機会を増やしてほしいです。

次に、公民館が持つ社会教育の専門性を活かしてほしいという事です。個人の課題を地域課題へとつなぎ、一人ひとりの困りごとに寄り添った講座を提供する。そのために、いろんな団体と連携して、「主催側として講座を開く」という形の学びを、多くの方々に提供してほしいと思います。

また、講座のオンラインへの対応（録画配信含む）や、予約や提出書類をオンラインで済ませられるなど、オンラインやデジタル化への対応をぜひ進めていただきたいと思います。

そして、オンラインが進んだ反動もあり、公民館という「場」にリアルに集うという事の価値も上がっています。そのため、「場」としての価値をさらに上げるような取り組みも実施してほしいと思います。具体的には、インスタ映えするようなおしゃれ感や、机の配置などの集いやすい雰囲気づくりなどを、現役世代や若者世代を巻き

込んで、一緒に進めていっていただけるといいのではないかと思います。

現役世代はなかなか学びに参加しないと言われますが、確実に学びのニーズは存在し、実際に活動している方もたくさんいます。ただ、その方々が公民館につながっていない、というのが現状の一番の課題だと思います。まちの学びの中核となり得る、こういった方々に公民館がつながっていけるように、様々な連携や場づくりや情報発信の工夫などを行っていくことで、現役世代にとっても使いやすい使いたくなる公民館にしていけたらいいのではないかと思います。

事例発表 登壇者トーク

登壇者：山下瑠里子さん

諏訪玲子 さん

助言者 東京学芸大学教育学部准教授 柴田彩千子さん

【司会】

ファシリテーターとして、東京学芸大学准教授の柴田先生をお招きしています。柴田先生は専門の社会教育生涯学習の分野において多摩地区の公民館のさまざまな活動に実践的に関わっておられます。コロナ禍の多摩地区の現状を詳しくご存じです。何か質問がある方は終わってからにしてください。それでは御三方登壇していただきます。先生よろしくお願いいたします。

【柴田】

ここからはお二人のトークセッションを踏まえまして、15分ぐらい議論していきたいと思います。ただいまご紹介にあずかりました東京学芸大学の柴田でございます。よろしくお願いいたします。

今回59回目、1960年代からこの大会が開催されているということで、田中委員長の御挨拶を伺って、ふとその時思ったのですがけれど1960年代と申しますと、日本が経済成長を著しく遂げていた時代でした。その過程で経済から地域の生活に住民の方々が目を向けて行った時代、経済成長だけではなく、精神的にゆとりのある、潤いのある生活ってどんなものであろうということを改めて考えた時代であり、それが公民館活動の課題の大きなテーマだったと思います。そのような時代背景の下に、この大



会が開催され始めた事実を振り返って考えてみますと、時代に即した公民館像というものがあるように思っています。基調講演でありましたとおり、コロナ禍の現在に即した意欲的な活動を実践する公民館を作るにはどうしたらいいのかということを、今後の時間で皆さんと一緒に考えてまいりたいと思います。

まずは、お二人の話に共通していたこととして、公民館はやはり地域にとって必要な場所だ、けれどもなかなかアクセスしづらい、それは心理的な壁がちょっと邪魔しているのではないかなというようにお話をいろいろな側面から指摘してくださいました。この心理的にアクセスが良い公民館をつくるためにどうすればいいかということを考えた時に、例えば具体的にどうすればいいのかということについて、お二人にアイデアをお話していただきたいと思います。では最初に山下さんからお願いいたします。

【山下】

そうですね。心理的にアクセスが良いということを見ると、私が子ども時代のことになるのですが、先ほどちょっと私が話しましたが、私の地元はなかなか公民館活動が盛んな地域ではなかったということもあって、やっぱり小さい時から公民館という場所が自分の活動場所や居場所として選択肢の中になかったのです。何かする時にどこを探るかとなったら、やっぱりカフェに行くとか、その第一に友達に電話するとかと、そういう選択肢しかなくて、公民館という方向すら思いつくことすらなかったところがあります。なので、その選択肢をまず増やすためにも、やっぱり小さい時から親しみを持っている場所にするところで、心理的な距離をなくせるのかなというふうに思います。後はその諏訪さんの話にもありましたけれども、やっぱりいい感情を取り入るといえる、そういうところで、ちょっと行きにくい場所ではなくて、オープンな感じの雰囲気を出していくみたいなことが大事かなと思います。

【柴田】

はい、ありがとうございます。やっぱり大人になってから公民館に行って学びなさいと言われてもなかなか行かないですね。子供のうちから公民館ってすごく身近な存在なんだという原体験を持っていると、成長過程である時期にちょっと公民館との距離が遠ざかっても、例えば子育てであったり退職後であったり何かのきっかけがあった時に公民館にアクセスしやすいのではないかなという事例をいただきました。では諏訪さんいかがでしょうか。

【諏訪】

今の話は本当にそうだなと思います。私は地域活動をたくさんやっていて、なんで

そんな人になったんですかとよく聞かれるのですが、子どもの頃にも、公民館によく行っていたんですね。まちの“かるた大会”で、賞状やメダルをもらったり“公民館まつり”で出店とかもしていました。なので、そういうことが大事なのかなと思います。そして、その時の記憶もそうですし、今もそうなんですが、心理的アクセスをどうよくするかという時に、“ロコミ”とか、友達とかがやっているとか、親に誘われてとか、誰かが行っているのについていく、みたいなのが、一番行きやすいのではないかなと思います。そういう意味で、PTAと連携をして、友達が主催していると言われると、「行かなくちゃ！」とか、「行ってみようかな」とか、ちょっと思うのではないかなと。そういうのがすごく大事かなと思います。

共催という話も、単純に若者が入って一緒にやれたらいいよねというだけではなくて、その人が、LINEとかで「こんなこと私やるからさ、みんな来てよ。興味あるでしょ？」と言われると、公民館のことを知らなくても、「あ、ちょっと気になるな、行ってみようかな」と、行ってみたら公民館だった。「あっそうか公民館ってこういう場所だったね」と気が付く、みたいな流れもあるかなと思っています。

【柴田】

はい、ありがとうございます。やはり公民館講座って、人を集めるのに一番効果的なのは“ロコミ”なのではないでしょうか。やっぱり知っている方が主催している講座だと行ってみようかなと思いますよね。チラシだけ見て行ってみようかなとか思うのは、テーマに自分のニーズがかなり合っていて、なおかつ時間が合う時だと思います。人と人との繋がりのなかから公民館に集まってくる

ということが重要だっていうことですよ。

それから、諏訪さんの最初のプレゼンでは、例えば子育てで困っていることを自分の中に閉じ込めておかずに、それを地域の課題としてみんなで考えていこう、自分の課題がこうやって講座のテーマになる感激の声っていうのを紹介していただきました。その生活の困りごとを公民館は「みんなと一緒に解決していくことが実はできる場なんだ」っていうところですよ。でも他の方々にはそのような場が公民館であることを知っていただけないので、“ロコミ”っていうのは有効な広報手段です。

もう一つ、二人のお話から、もうちょっと公民館を“おしゃれ”な空間にしていけばいいのじゃないかというアイデアが出ました。公民館というとやっぱり古めかしいイメージでしょうか。やはり横文字の“カフェ”と比べて、やっぱりそうでしょうか。公民館をおしゃれにしていくためには、若者世代、子育て世代の方にとって例えばどういう要素があったらいいと思いますか。

【山下】

もともともないですが、建物を作り変えるとか。

【柴田】 例えばどういうデザイン？

【山下】

私もインスタをやっていますし、今の若い子は TikTok なんていうのをやっている世代なので、やっぱり写真映えするようなガラス張りの空間で、なんかこう日光が差していて緑もあって、おしゃれみたいな。もともともないんですが。

【柴田】

はい。みんなであま建物そのものはなかなか難しいですけど、装飾とか外観とかそういうところで、なんかアイデアはないですか。

【山下】

すべてみんなでつくるっていうところに一つ意味があるかなと思っています。パッととは思いつかないんですけど、作る過程にも若者とか当事者に入ってもらえるだけでも一定の効果が出せるのではないかと思います。その行きつく形がどうであれ、そこに「自分たちが入って意見が出せて楽しかったよ」みたいな感じになるのかなと思います。空間デザインを学ぶっていうのもあるのかなと思いましたね。

【柴田】

はい、ありがとうございます。作っていく過程、公民館をおしゃれにしていく過程に若者が入ることが大事ということですね。

【山下】

そうですね。

【柴田】

大人たちがいくら考えて、「こういうものができましたよ」と言っても、若者がその過程に入っていくことが大切という意味ですね。諏訪さんどうでしょう。

【諏訪】

ちょっと“おしゃれ”とは違うのですが、でも、「教室みたいな感じが怖い」とか、「トラウマを呼び起こす」という人が結構居るんですよ。例えば、不登校支援の活動とかをしている時に、保護者自身も学校へ行きたくなかった思いがあったといった時に、黒板があります、机があります、椅子があります、並んでいます、みんな前を向いています、という時点で、もう「苦しかった」という記憶が思い出されてしまうんです。学校教育が悪いっていう訳では全然ないんですけど、やっぱりこう決まった感じとか硬い感じということ自体で居心地が悪いと感じてしまう人が結構いるんだなということに、活動していて気付くことがあります。だか

らわざとぐちゃぐちゃにしてみて、きちんとしていない感じに並べなおすといったことも時々やるんですね。そういうのも、おしゃれとはちょっと違うんですけど、居心地の良さみたいなのところではあることができるのかなと思ったりもします。

【柴田】

なんとなく学校教育の延長線上に講座があるのではないかというような先入観、これをどう払拭するかということですね。先ほど山下さんが最後に例えば子どものうちから学校と、例えば公民館と連携して授業の一部であったり、それから部活動の地域移行であったりとなつて議論されていました。さまざまな子供といろんな繋がり方があると思いますが、たとえば、どんな風子供たちが公民館を捉えてこちら側に来てくれるといいなと思いますか。

【山下】

そうですね。私の友人の話なのですが、スライドを作るにあたって話した時に、一人だけ公民館に親しみを持っている子がいたんですね、その子たちに話を聞いた時に、やっぱり学区内探検で公民館に行った子は、親しみを持っている子が多かったんですよ。どういう使い方で公民館に行っていたのかなと聞いたら、講座に行ったことはほぼなくて、卓球かカードゲームをしてたって言ったんですね。そういう場所としていつでも行きやすい場所としてなんか認識をしてくれていたみたいなので、そのきっかけが学区内探検だけではなかったと思うんですけど、なんかそういう“きっかけづくり”、“種まき”をしておくっていうのは大事だと思いますね。

【柴田】

はい、ありがとうございます。学区内探検を機に通いだしたということですね。保護

者の立場としてお子さんに公民館に親しんでいただけるにはどういったようなことをすればいいとお考えですか。

【諏訪】

そうですね、卓球とかカードゲームとかの機会もすごく大事だと思う一方で、今私の一番上の子が中学生なんですけど、そうやって遊んでいた子も、中学生ぐらいになると来ないですよ。で、息子によく聞くんですけど、「どうやったら公民館に行くかな？」と。そしたら、「Wi-Fi。Wi-Fiが飛んでいるかどうか」「ゲームやっていて怒られないか」と即答でした。Wi-Fiが飛んでいて、そこにいる時はネットと一緒につないで、みんなで対戦ゲームができるってなると行くかなと言っていました。誰かの家のWi-Fiを勝手に使うことはできないし、公共施設で誰でも使えるWi-Fiがあれば、一緒にゲームができるので。ゲームっていろいろと言われがちですけど、最近の子どもたちにとってはコミュニケーション・ツールなので、中学生・高校生ぐらいの子どもたちとなってくると、やっぱりWi-Fiかなと思います。

【柴田】

今の子どもさんの世代って、Wi-Fiがある施設は必須ですね。特に今小学校では、数年前からGIGAスクール構想の取組みが始まって、1人1台タブレット端末が学校で配られて、宿題なども家に持ち帰って子どもたちがやるので、子ども達が「一緒にどこかで宿題やろう」という時もWi-Fiが必須、Wi-Fiが必需品ということですね。

こういった新しい視点を取り入れていきながら、今後、心理的にアクセスのよい公民館づくりで、どういうことが、どういう要素が必要なのかということにつままして、後半のグループワークでは、皆さんお一人お

一人主演になって頂いて、ご用意いただいた“エンタくん”を使っていたいただきながら考える、共に考える時間にしてまいりたいと思います。

【司会】

皆さんありがとうございました。それではちょっとお待ちください。この三人の方に何か質問したい方がいらっしゃったら、今この時間に、短くお願いしたいのですが、お受けしたいと思います。

【質問者1】

貴重なお話ありがとうございました。諏訪さんに質問があります。諏訪さんにとってのきっかけは国分寺の答申の中にそういう投げかけがあったからというふうに理解して宜しいでしょうか。

【諏訪】

私の活動のきっかけは、三人の息子のうち一人は発達がゆっくりなんですね。その子はどういうふうに生きていくのだろうかと考えた時に、みんなで考えたいなと思って、そういう場を作りたいとなり、公民館で学びの場を作っていこうかなとなったのが、私自身のきっかけです。ただ、答申の話でいうと、P連のきょうどう学習委員会の活動で、どうやって学んだらいいのかわからないとか、どうやってテーマを決めたらいいのかわからないとか、くじ引きで来てる保護者の方も多くてですね。そういう中で、どうやったらより良い学習活動ができるんだろうという課題をP連側も抱えていたんです。その時に、私の2代前にP連から公運審に参加されていた方が、これ連携した方がいいんじゃないかということで、答申にまとめていただいたという形なので、P連側からのニーズもあつての連携という形になっています。

【質問者1】

ありがとうございました。

【質問者2】

楽しい、すごく活気のある発表ありがとうございました。山下さんに質問があります。学生さんの立場で、やはり周りの人たちとのギャップというものを今も感じていらっしゃるでしょうか。

【山下】

そうですね。今もずっと感じている状態です。

【質問者2】

どうするとそのギャップを埋められるか、あと一年学生生活があると思うので、その一年でどのように伝えていけるのかちょっとお聞きしたいと思います。

【山下】

そうですね。まず、学生と私の友人との会話の中で、公民館が話題に上がることがまずないので、もうちょっと私が発信する側になればいいなというふうに思っています。だから何か「自分がこう思っている」というのをすべて言うのではなく、何か一言でも口に出して言えることで、とにかく変わったりするかもしれない。こんなにここに人数がいっぱいなので、こう皆さんが何か一言でも発すれば何かが変わるかもしれないという期待を持ちつつ、一年やっていきたいと思っています。

【質問者2】

つい本当に嬉しい、頼もしいという気持ちになって、公民館、これから進化していきなっていくのがすごく伝わってきました。ありがとうございました。

続いて諏訪さんに質問があります。すごく学校っていうのはすごく硬いイメージがあるのですが、PTAの連携で、これはちょっと本当に厳しかったなという壁というか、PTAの立場として学校とのそれこそギャ

ップとか、そういうようなことが思い出す
ことがありましたらお聞きしたいと思いま
す。

【諏訪】

学校側とのところでいうと、そんなにす
ごいことがあったかという、基本的には
そんなに学校側から何か言われるという
ことはあんまりないです。ただ、レポート
でまとめたものが「ちょっと誤解を招く表
現がありそうだね」みたいなことで「直して
ください」みたいな修正が入ることはあり
ます。ただ、どちらかというともあまり関わり
がないことの方が私たちにとって壁に感じ
ていて、実は先生に来てもらって一緒に学
びたいと思っているんですけど、先生側の
方が“PTAは保護者の組織でしょ！”と思
っていて、そういう壁がすごく大きくって、
公民館との間よりも学校とPTAの壁が結
構大きいかもしれないという感じです。

グループ発表と助言者のまとめ

助言者 東京学芸大学教育学部准教授 柴田彩千子さん

1 グループ発表

【テーマ：アクセスのよい公民館とは】
9つのグループに分かれて心理的なアクセスという点でのグループワークした後に発表していただきました。

【A グループ】

- ・次の公民館世代への種まきが大切
- ・職員の力量とアンテナを高める

【B グループ】

- ・子ども主体の講座・イベントを企画
- ・学校・子育て世代に公民館が出向く
- ・若者向きのフリースペースが重要

【C グループ】

- ・地域のイベント、若者参画を増やす
- ・子どもたち向けにも Wi-Fi は必要
- ・室内のおしゃれ感、ポスターを工夫

【D グループ】

- ・高齢者より若者・子どもに焦点を
- ・職員の趣味活かす講座・イベントを

【E グループ】

- ・知って、来て、はまって、もらう
- ・オープンスペースは Wi-Fi が必須

【F グループ】

- ・中高生が主体で講座を企画する
- ・子どもの参加し易いサロンや企画を

【G グループ】

- ・若者向けのフリーな Wi-Fi・カフェ
- ・公民館の愛称・イメージ戦略も重要

【H グループ】

- ・フリーWi-Fi と事前の安全講座受講
- ・お洒落なフリースペースと若者企画
- ・地域の人が当事者になってもらう

【I グループ】

- ・公民館の愛称を親しみやすい横文字に
- ・子どものための安心安全な居場所を

2 助言者のまとめ

「心理的アクセスのよい公民館とは」というテーマのグループ討議で、キーワード出してまとめていただき、発表をしてもらいました。たくさんの良いアイデアが出てきたと思いました。

●子どもへの種まき

多くのグループで子どものうちから公民館に慣れ親しんでもらえる環境を大人たちがつくっていくということが大事だという意見が出され、それを「子どもへの種まき」と表現をされたグループがありました。そのグループでは、子どもが主体となって企画運営できるような講座を公民館でやってみてはどうかという提案がありました。実際にやっているところもあるようですが、子ども企画、子どもが本物の体験をするということで、いろんな人と交渉しながら、アイデアを出していった課題解決に向かう、そういう取り組みが地域で、公民館でできるのではないかと、ということだと思います。

●誰もが自由に集える居場所

公民館というのは、やはり face-to-face で集える地域の場所のひとつだと思います。公民館が地域の方の誰にとっても気軽に訪

れることができる居場所になるということが必要なのではないか、そういう意見がたくさん出ていました。

そのためには、例えば講座の開催がなくてもふらっと立ち寄れるようなフリースペースがあることが大事であり、そのフリースペースの中で、例えばひとりで過ごしてもいいし、誰か仲間と話をしてもいい、自由気ままに過ごすことができる、誰もがフリースペースを活用できるということを地域の方にもっと知っていただくことが必要なのではないかと思いながら発表を伺っていました。

●明るい雰囲気のあるフリースペース

そのフリースペースに明るい雰囲気をつくり出すにはどうしたらいいのか、ということで、例えばハード的なデザインを地域の若者たちにゆだねてみてはどうかとか、そこには職員さんがいるので来館者に明るく声掛けをしていただくこともできる、というような人と人との交流が行われることもとても大事なことだと思います。

●安心・安全な居場所

公民館というのは、やはり地域の方にとっては安心・安全な場所です。安心・安全な場所なので、保護者にとって公民館に子どもが行っていると、安心感があります。その居場所では、Wi-Fi が使えることが必須だという意見がたくさん出ていましたが、Wi-Fi が使えて安心な大人がいるという空間のフリースペースは公民館にとって、とても大事なのではないかと思います。

内閣府が実施している子ども若者対象の意識調査があります。その調査結果として、家庭も含めて地域の中に、子どもたちにとって自分の居場所だと思える場所がたくさん

あればあるほど子どもの自己肯定感が高まるというデータが示されています。

●相談できる大人がいる

また、この調査では保護者や学校の先生以外に地域の中に相談できる大人がたくさんいればいるほど子どもの自己肯定感が上がるという、分析データも示されています。公民館が子どもにとって相談のできる大人のいるひとつの居場所になるということが必要なのではないかと思い、皆さんの発表を伺っていました。

●Wi-Fi のある公民館

Wi-Fi というのもキーワードのひとつに出ていました。子ども達が危険な使い方をしてしまうのではないかという保護者の懸念についても話し合われていましたが、公民館で開催するネットリテラシーの講座に参加することを条件に公民館のフリースペースで Wi-Fi を使えることにしたらどうか、という意見はいいアイデアだと思いました。

●インターネット、子どもからの波及効果

ある自治体の地域防災訓練に参加したことがあります。小学校低学年の子どもたちが地域安全マップを社会科の授業でついたり、総合学習で学んだ防災教育の成果を、子どもたちが防災訓練に参加した大人たちにプレゼンをしている姿がありました。

子どもたちがタブレットを自在に操って、流行のアニメなども取り入れながらプレゼンをしていました。

その姿を見た高齢者の人たちが、小さな子どもたちでさえ、「あーやって、インターネットを使ってプレゼン資料を作成し、上手に発信している、自分たちもやればできるんじゃないか」と考え、今まで敬遠してい

た地域の学習施設でのインターネット講座に参加するようになったそうです。さらに、子どもたちの地域安全マップを見て、防災ウォークラリーの活動を始めたとのこと。健康増進の活動と兼ねて地域の防災拠点をみんなで歩いてみようというイベントです。これは子どもと大人の学びの相乗効果というか、子どもから刺激を受けた大人への波及効果ではないかと思います。

●「ワクワク楽しい」の環境づくり

それからやはり、公民館はワクワク楽しく活動をする場であって、みんなで生活を豊かにしていく場、これは公民館の大切にしていけるべきところだと思います。ワクワク楽しく、やりがいを持って取り組んでいる大人を、子どもたちが地域で見て育つということもとても重要なことだと思います。大人になっても学びを続け、ワクワク楽しい大人が近隣にたくさんいる、こういう環境づくりを醸し出す装置としての公民館、そういう役割もあるのではないかと思います。

●「きて、みて、ふれる」公民館

最後に公民館に新しい層の人たちを呼び込むために、とてもよいキャッチフレーズが出てきたと思います。「きて、みて、ふれる」、とにかく来てもらって、知ってもらって、見てもらって、触れてもらう。これからの公民館の活動の核になっていく人たちが、まず「きて、みて、ふれる」ことから始める。すごくいいキャッチフレーズだなと思いながら伺いました。

とてもいい議論が多くのグループで展開されていて、私自身も大変勉強させていただきました。今日は本当に充実した話し合

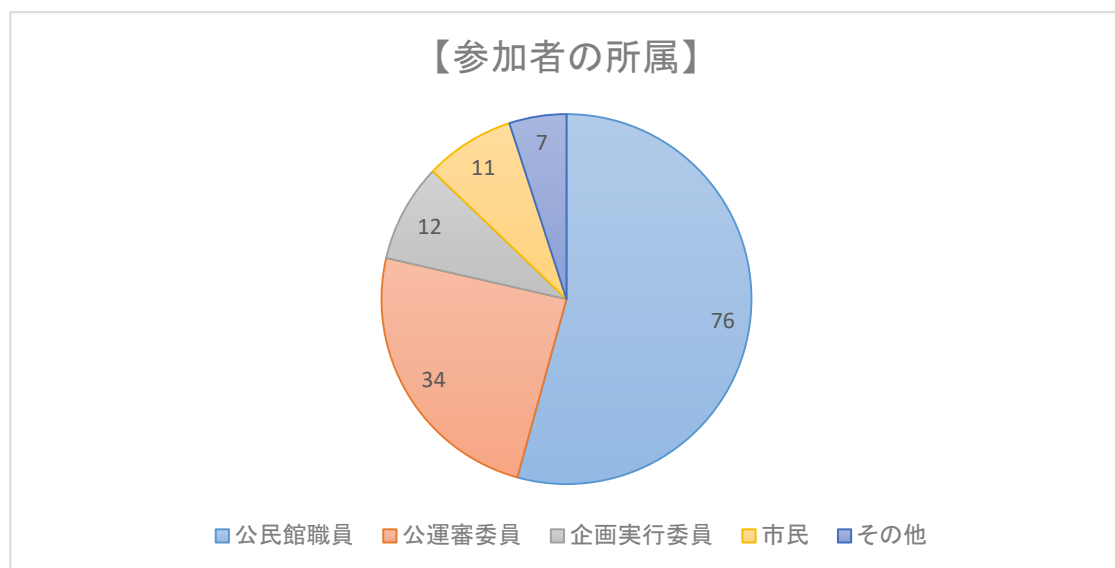
いとなり、皆様、お疲れ様でございました。今後の活動に活かしていただければと期待しております。



第59回東京都公民館研究大会 アンケート結果

1 所属を教えてください。

参加者 140 名（回答者）の所属について、割合が最も高いのは「公民館職員」（76 人・54.3%）、次いで「公運審委員」（34 人・24.3%）となっています。



2 第59回研究大会への参加理由を教えてください。

研究大会の参加理由について、回答の割合が最も高いのは「内容に興味があった」（53.7%）、次いで「大会に興味があった」（22.9%）、「その他」（15.4%）となっています。（複数回答）

【研究大会に参加した理由】

設問		回答数	割合
1	大会自体に興味・関心があった	37 人	22.9%
2	内容（テーマ）に興味・関心があった	87 人	53.7%
3	講演者に興味・関心があった	13 人	8.0%
4	その他	25 人	15.4%
	計	162 人	100.0%

3 第59回研究大会をどのような方法で知りましたか。

研究大会を知った方法について、回答の割合が最も高いのは「職員から」（67.4%）次いで、「その他」（17.0%）、「ポスター・チラシ」（8.9%）となっています。（複数回答）

【研究大会を知った方法】

設問		実人数	割合
1	ポスター・チラシ	12 人	8.9%
2	HP	0 人	0.0%
3	広報紙	7 人	5.2%
4	職員から	91 人	67.4%
5	友人・知人から	2 人	1.5%
6	その他	23 人	17.0%
	計	135 人	100.0%

4 この大会への参加は何回目ですか。

回答者のうち、はじめて参加した人が 60 人（45.5%）でした。

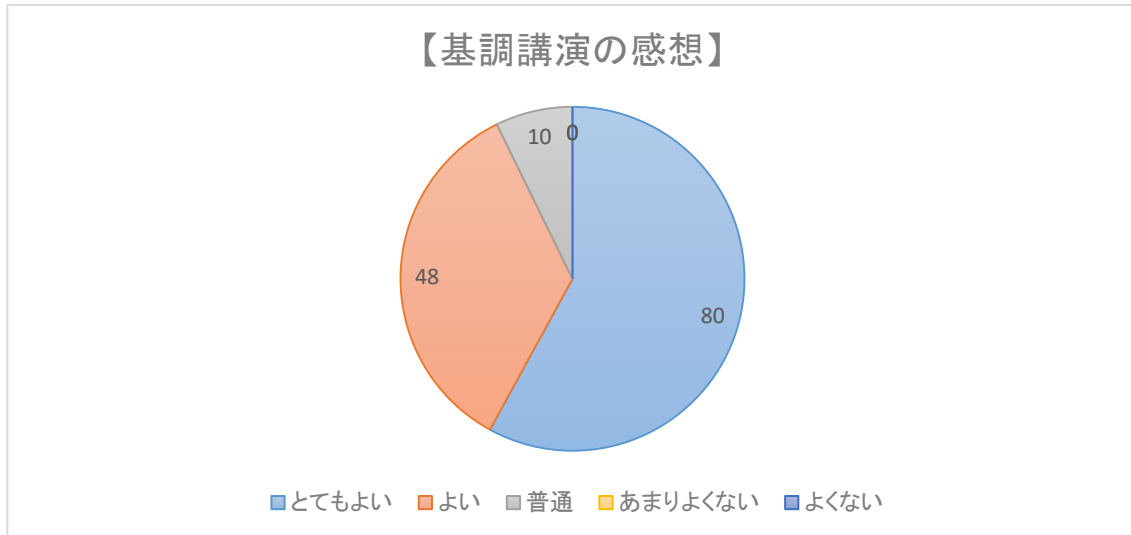
参加した回数についてみると、2～3回目の方が 30 人（22.7%）、4～5回目の方が 20 人（15.1%）、それ以上の参加の方は 22 人（16.7%）でした。

【研究大会に参加した経験】

設問		実人数	割合（%）
1	はじめて	60 人	45.5%
2	2～3回目	30 人	22.7%
	4～5回目	20 人	15.1%
	それ以上	22 人	16.7%
	計	132 人	100.0%

5 基調講演(動画)について伺います。感想を教えてください。

基調講演（動画）に対する感想について、回答の割合が最も高いのは「とてもよい」（80人・58.0%）、次いで「よい」（48人・34.8%）となっています。



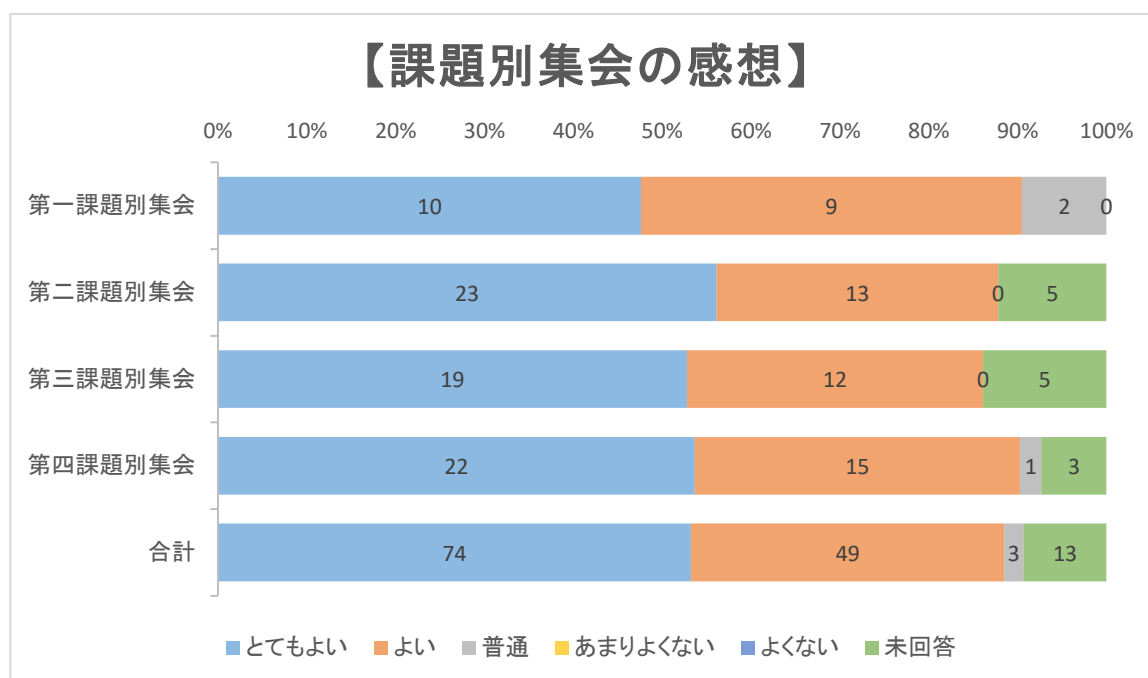
【回答の理由（抜粋）】

- ・ コロナ禍の公民館を振り返る良い機会となった。
- ・ 他の具体的な取り組み事例が知れて、良い刺激になった。
- ・ 新たな気づきに繋がられた。
- ・ 論点が整理してあり、わかりやすかった。
- ・ 3つの視点・3つの気づきにまとめられた内容がわかりやすかった。
- ・ 聞き取りやすく、わかりやすかった。
- ・ コロナ前に戻った公民館のあり方を考えていくのではない、プラスの考え方が良いと思った。
- ・ 公民館の直面する課題を正面からとらえており、考えの助けになった。
- ・ 世界共通課題という視点は自分にはなかったもので、大変勉強になった。
- ・ 出来ればオンラインで見ただけじゃないほうがよかった。
- ・ 少し早口に感じた。
- ・ テーマに沿った内容で、示唆に富む気づきも与えてくれる構成もしてあり、感心した。
- ・ コロナ禍での公民館の在り方を総論的にまとめられて非常に良かった。
- ・ 時節に合ったテーマだった。
- ・ コロナによる変化を悪しとせず、むしろ今後何を引き継いでいくのか考えていく必要性を感じた。

6 課題別集会について伺います。参加した感想を教えてください。

課題別集会に対する感想について、全体で回答の割合が最も高いのは「とてもよい」（74人・53.2%）、次いで「よい」（49人・35.3%）となっています。

各課題別集会ごとの回答は、グラフに表示のとおりです。



【この課題別集会を選んだ理由や参加動機】

- ・ テーマに興味・関心があったため。（第一・第二・第三・第四）
- ・ 事例に興味・関心があったため。（第一・第二・第三・第四）
- ・ オンライン参加できるため。（第一）
- ・ 現状に合ったテーマだったため。（第一）
- ・ 参加人数が多く、幅広い話が聞けると思ったため。（第二）
- ・ 地域と公民館のつながりに興味があったため。（第二）
- ・ 地域の課題解決について興味があったため。（第三）
- ・ 講師に興味があったため。（第三）
- ・ 学生の発表が聞きたかったため。（第四）
- ・ 若者世代へのアプローチを主題にしていたため。（第四）

【課題別集会でのご意見や感想】

- ・ 事例発表者の方々の分かりやすい説明、とても勉強になりました。私はオンライン参加でしたが、資料も見やすかったです。（第一）
- ・ コロナ禍での数年間で得たことを今後に生かしていけたらと思いました。（第一）
- ・ 池谷先生の講演しかり、これからの公民館の在り方として、市民に向けて行動を示していく必要があると強く思いました。（第一）
- ・ 市民の方との対話が最も大切なのだと改めて気付かされました。公民館配属になってもう少しで1年になりますので、2年目は市民目線の考え方ができるように心がけたいです。（第一）
- ・ 「楽しさ」を何より大事にするという言葉が強く印象に残っています。持続していくためにもまずは「楽しさ」という視点で物事を考えることでもしてみようと思いました。（第一）
- ・ 公民館の活動は対面が基本だが、オンライン、ICTをプラスαのツールとして使うことにより、広がりが出てくると同時に、深まりにもつながる可能性もあるかもしれない。（第二）
- ・ 他市や他地域の工夫が知られてとても学べた。ICTよりもDXってところがもう少し詳しく聞きたかった。（第二）
- ・ つながりはナマモノだと改めて感じた。ICT活用はつながりのためのツールのひとつで、それが目的にならないようにすることが大切だと思った。（第二）
- ・ コロナ禍で、オンラインなど進めていかなければと思っていたが、オンラインだけでなく、集まることも大切にしていきたいと感じた。（第二）
- ・ グループ討議の時間が短くてあまり掘り下げられなかった。（第二）
- ・ 他市の成功事例を自分の市にあてはめて参考にするのをいつも難しいと思っていた。もっと小さい単位でできることを探そうと思った。（第三）
- ・ 日々の業務で忙しい中でも、『すきま時間』を見つけ、『小さな出会い』を大切にしたい。（第三）
- ・ 今回公民館でない地域センターの方からのお話でしたが、いろいろな気づきがたくさんありました。（第三）
- ・ 「学習館・公民館に若者も来てもらいたい」とよく言うけれど、呼んだその先に何があるのかと思っていた。でもそこから自然発生するものを楽しめばいいのだと思った。（第三）
- ・ つながりを大事にし、どんどん話しかけて対話をし、地域課題を捉えて事業に展開していきたいです。（第三）
- ・ 公民館・社会教育は生活・人生をよりよくすることを支える基盤だから各団体の親睦・交流を大切にしていきたい。（第四）
- ・ 次世代に向けてどのように公民館へのハードルを低くしていくかというところに絞って話し合え、とても有意義な時間だった。（第四）
- ・ 子どものうちから親しんでもらうことが大事。子ども自らが考える企画。公民館を開かれた場所にすることが大事だと思った。（第四）
- ・ オンラインと対面を活かした企画をもう少し増やしたい。反面、ますます職員の力量が問われると思う。（第四）
- ・ 公民館でしかできないことは人と人とを結んでいくこと。小さい時から行きやすい場を設けていくことの大切さを感じた。（第四）

7 大会全体の感想や今後の公民館活動のあり方に対するご意見などを教えてください。

【自由記述】

- 様々な人の事例を聞くことで、新しい発見が沢山ありました。自分では思いつかないようなことばかりだったため、とても良い刺激を受けました。公民館は、コロナ禍を乗り越えて、新しい公民館へと切り替わる時が、今だということを感じ取り、他市の事例を元に、自分の市でも新たなアクションを起こしてみたいと思いました。
- コロナによる公民館の休館や閉館時間の短縮がありましたが、池谷先生のお話にありましたが、隣の市の公民館は開いているのに、こちらは閉まっている、ということがありました。そのところの説明が今回のコロナ禍では、足りなかったように感じていました。他の部分でも、利用者への情報発信を充実させて、利用者と密につながってほしいと思いました。
- 今回、ZOOMで参加させていただきましたが、基調講演や事例報告等での画面上の説明資料が、大変見やすかったです。また、説明資料と一緒に、講師や発表者の顔も画面上に投影されており、オンライン開催での工夫が随所に見受けられ、大変勉強になりました。ありがとうございました。
- 初めて大会に参加しましたが、公民館・社会教育について改めて勉強できました。普段の業務の中では他市の事業について得られる情報が少ないため、こういった形で情報共有ができると新たな刺激になると思います。
- 初めてでしたが、参加させていただいて有難かったです。今後も学びの機会を得て地域の方々と一緒に活動させていただいていきたいと思います。ありがとうございました。
- 非常に興味深く、多くの課題に気がつくことができた大会であったと思います。私自身が講座を企画したり、館を運営したりする業務（部署）についていないため、アイデアを試すことができずもどかしいところですが、そのアイデアに対する課題も見えてきて、まだまだ思考の余地がありそうです。ソフト面はもちろん、ハード面（複合施設など）についても今後課題が出てくるかなと思いました。
- 実践の報告がとても勉強になり、参考にしたいことばかりでした。様々な方とお話ができ、来年度の取り組みに向けて活かしていきたいと思います。
- 学校との連携ができたらいいと思う。今後良い意味でコミュニティスクールというところから、どう公民館とやっていけるか。職員の在り方が地域とつなぎ、市民とつなぐがどうつけていくか、職員が大切と改めて感じた。
- 行政としての制約がある中、まずは行政全体がDX化を図るところから始めないと指定管理者とは勝負にならないということがよくわかりました。コロナ禍の中、休館していてもなんとかしようという使命感をもって実践されてきた職員の皆さんに敬意を表したいと思います。公民館の利用者が高齢化しても、来館できないが学びたい人たちにZOOMなどで学習の機会を提供していくことが次の世代にも社会教育をつなげていくことが必要なのだと考えました。

- 多くの市の方々に参加していただきたい。
- 課題別集会のテーマがぼんやりしていた。せっかく4つの集会を作るなら、それぞれの角度を分担・明確にしてほしかった。
- 今回のような日頃の業務でのヒントとなるような課題別集会での学びを提案していただきたい。自分がワクワクドキドキするような企画運営に取り組もうと思います。
- 対面の良さを感じました。グループ討論の際、全員の盛り上がりを感じました。
- 私の市では講座がメインとなっており、イベントも文化祭やお祭りなど決まりきったものが多いと思っています。地域課題に目を向ければ、毎年同じようなものを行うばかりではいけないと思います。実際は担当が一人で考えるような仕組みになっているため、見直していけるよう取り組んでいきたいと思いました。
- 地域活動や社会教育に興味のある大学生もいるので、そのような学生が入っていきやすい雰囲気、仕組みづくりが大切だと思った。講師の方々や参加者の話を聞くことができてよかった。
- テーマによっては聞きたいものはあるが、みんな身近なものが良いと思う。人生100年時代を考えると、長生きするには、やりがい、生きがいが必要と思い、公民館での講座受講やサークル活動がはげみになっていると思う。待つ公民館ではなく、攻めの公民館を目指してほしい。
- 「公民館」がつぶされていく中、公民館の役割を再認識する必要があります。地域課題を解決するのが公民館の役目。これはコミセンや集会所ではできません。公民館職員のやる気、ポジティブな考えに期待します。
- いろいろな市のいろいろな立場の人たちと話すことができてとても有意義だった。
- 都公連の充実で他市との交流の拡大を図り、情報交換をすることで、もっとよい公民館になると思います。
- 今後も初めから会場を分け、それぞれ基調講演を視聴する方法でよいのではないか。
- 『コロナ禍で経た経験を活かす』という事例報告にもあるように、時間については今回の形をスタンダードにするべきだと感じた。（1日は主催者・参加者とも負担が大きい）
- オンライン参加でしたが、時々音声がマイクに入らないことがあったのが残念でした。
- 課題別集会全部、オンライン併用でお願いしたい。出みたい課題別集会があったものの、オンラインがなかったので、今後検討していただけたらと思います。
- 会場が暗くて、メモが取りにくかったです。
- 机の対岸の人の声があまり聞こえなかった。議論の柱が具体的に示されていた方が話しやすかったかもしれない。名札も見えず誰だか分らなかった。
- 午後だけなら基調講演はなしで短めで、グループワークを長くするようにしてほしいと思いました。